女子國文選

〔新制版〕

巻六

375.9
Me9
資料室

42344
教科書文庫
4
810
42-1937
200030
2414

資料室

375.9
Me9

昭和十二年十二月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

女子國文選

新制版

明治書院藏版

廣島大學圖書之印

廣島大學圖書館
教
35863
図書

はしがき

一　教材は、現代の趨勢に鑑み、我が國體の精華・國民精神の發揚に意を致し、質實・穩健・高雅なる性情の涵養を旨とし、特に文の醇正雅健なるものを選擇して、全卷を首尾一貫、系統あり連絡あらしめたり。

一　材料の選擇は、國語教授の目的に副ふべく、成るべく各種の文體に習熟せしめんことを期し、現代の秀作を始め、各時代に亙りてその傑作を網羅せるは勿論、なほ各種の有益なる知識的教材をも適當に採錄して、詞藻を豐かならしめたり。

一　文字・假名遣の用法はいふまでもなく、送假名も全卷を通じて讀み易きを主とし、世間の慣用に從つて統一あらしめんことを期したり。

一　漢字は必ずしも正字に拘泥せず、寧ろ通用に從ひたれども、一面、正俗字辨別の要あるにも鑑み、これを一表として初級用の各卷末に附し、漢字に對する正確なる知識を得しめんことに注意したり。

一　特に上級用にありては、我が國文學の變遷の大綱を知らしめんことを期し、附するに文學年表を以てし、彼此對照せしめて、これが發達の徑路を觀察せしむるに便ならしめたり。

目次

一 讀書の選擇……小泉八雲……四
二 田園雜興……大町桂月……一四
三 すがの荒野……（曾我物語）……二五
四 空行く雁……二
五 宇治河の先陣……（源平盛衰記）……三二
六 熊野落……（太平記）……三九
七 巡禮……近松半二……四七
八 旅と歌と……佐佐木信綱……五五
九 長谷寺詣……幸田露伴……六〇
一〇 鶉衣……横井也有……七〇
一一 灸……石川雅望……七四
一二 優生學と日本民族……永井潛……七八

一三 個性……太田水穗……八七
一四 小諸なる古城のほとり……島崎藤村……九六
一五 安藤廣重……鈴木敏也……九八
一六 伐木……吉江喬松……一〇五
一七 春日局……福地櫻痴……一一
一八 靜寛院……高須芳次郎……一二八
一九 橋本少將へ……靜寛院……一三七
二〇 西鄕と大久保……勝海舟……一三九
二一 人臣の道……（神皇正統記）……一五三
二二 版籍奉還に就いて……永田秀次郎……一五八
二三 君民一家……深作安文……一六六
附錄 同字表 宛字表 國字表

一　讀書の選擇

小泉八雲

小泉八雲　英國人。我が國に歸化す。東京帝國大學講師。明治三十七年歿、年五十五。

批評家の最も勝れたものは公衆である。一日・一代の公衆ではなく、幾世紀の大公衆である。時といふ嚴格な試驗を通過した書物についての、一國民乃至人類の輿論である。眞の名聲は、所謂批評家によつて作られるのではなく、幾百年間の人類の意見の蓄積によつて出來る。それは洗煉された批評家の意見のやうに鋭くもなく、明瞭でもない。說明も出來ない。譬へば、どんなものとも定義の出來ない、何か偉大な情緒のやうにぼんやりしてゐる。思想よりは感情に根ざしてゐる。たゞ「これが好き。」といふだけである。しかもこれほど確な判斷はないといふのは、それが非常に廣大な經驗の結晶であるからである。

東京大學圖書之印

書物の價値は、それを一度讀んで滿足するか、更に繰り返して讀みたくなるかで試驗が出來る。眞の良書は、最初讀んだ時よりも、二度目には一層心が惹かれ、讀み返す度に新しい意義と美とを見出すものである。教養あり、趣味ある人が、二度と讀む氣にならないやうな書物は、大したものではない。たとひ千萬の讀者に購はれようとも、二度と讀まれないやうな書物は、大概餘り價値はない。併し又、一個人の判斷を絶對に間違ひないものと考へる譯にも行かない。一流の批評家にも往々鑑識の鈍りも曇りもある。たゞ累代の公衆の判斷に至つては、疑ひの餘地がない。一讀しただけでは、何處がよいとも思へないやうでも、數百年來名著とされて來た書物には、よ

小泉八雲

く讀んで見ると、きつと成程と思はれる處がある。時の試驗に合格したこのやうな大傑作だけが、眞に藏書とするにふさはしいものである。「二度以上讀みたいと思ふ書物だけを買へ。それ以外のものは、特別の理由がない限り買はないがよい。」これが書物選擇の標準である。

次に注意すべきことは、かういふ大傑作に含まれてゐる價値は普遍的なものであるといふことである。大傑作は直ちに青年に感動を與へるものではない。初はたゞ表面の意味や筋が面白いだけである。かういふ書物の眞價を知るには、往々數百年を費したものがある。青年にたゞ一讀でその眞髓が分らう筈がないではないか。併し、讀者が人生の經驗を積むに從つて、次第にその書の新しい意味が見えて來る。十八の時面白いと思つたものは、

シェイクスピヤ　英國の劇詩人。（一五六四―一六一六年）
ダンテ　伊太利の詩人。（一二六五―一三二一年）
ゲーテ　獨逸の詩人。（一七四九―一八三二年）

二十五では一層面白い。三十になつては全然新しい書物に見え、四十にしては、何故今までこれほどの美しさが分らなかつたかと驚く。五十、六十になつても同じやうなことが繰り返される。傑れた書物は、讀者の心の生長に伴なつて生長する。シェイクスピヤや、ダンテや、ゲーテの作物の偉さは實にこゝにある。

これについて、ゲーテにはよい例がある。彼は短篇の物語をいくつも書いたが、子供にはそれがお伽噺のやうに面白かつた。青年には嚴肅な讀物となつた。中年の者はその中の一字一句にも非常に深い意味を悟り、老人はそこに全世界の哲學と人間の智慧とを見出した。つまり讀者の頭が勝れてゐればゐるだけ、人生を知つてゐればゐるだけ、作者の偉さが分るのである。

が、これは作者が自分の作品のもつてゐる廣さや深さを承知

ヨブ記　舊譯聖書中の一篇。

して書いてゐるからではない。勝れた天分は、自ら偉大だなどとはつゆ知らずに、無意識に働くものである。そして作者の天分が大なれば大なるほど、それを自覺する機會は少い。なぜならば、偉大な天分ほど、公衆は理解するのに長年月を要するからである。文學上の偉業は、通常自分で偉いと思つてゐるやうな人々によつてなされるものではない。

何千年の昔、アラビヤの或漂浪者が夜の星を眺め、人間とこの世を作つた見えざるものとの關係に心を打たれて、その心情を歌つたものが、今なほヨブ記の中に傳はつてゐる。併し彼にとつては、天空は固い丸天井で、その向うにまだ何かあらうなどとは夢にも思はれなかつた。爾來我々の天文學の知識は、どれだけの進歩を見たことだらう。今我々は三千萬の太陽のあることを知

アンデルセン　デンマークの詩人。（一八〇五―一八七五年）

り、恐らくそれには各〻若干の遊星があるであらうと推定してゐる。現在の望遠鏡では約三億の他の世界が見える。恐らく是等の世界の内には、智的生物の棲んでゐるのも多からう。火星には我我の文明よりも更に進んだ文明があるといふ證明さへ、數年の内には得られさうである。我々の宇宙の概念とヨブのそれとは、實に霄壤の相違である。しかも、その單純な詩は、それがために一毫もその美と價値とを失はないのみならず、新しい天文學上の發見のある毎に、ヨブの言葉は我々にとつていよ〳〵すばらしいものになつて來る。これはたゞ彼が勝れた詩人で、三千年の古人の心に宿つた眞をさながらに語つてゐるからである。

なほ一例を擧げれば、アンデルセンは、道德的眞理や人生の悟りは、短いお伽噺や童話で教へるに限るといふ考へから、古い話

を元にして澤山の新しい面白い話を作つた。その書が今日ではどこの圖書館にも備へつけられて、子供よりも大人に讀まれる方が多い有樣である。その中に人魚の話がある。一體人魚などといふものはあるものではない。見やうによつては馬鹿げた話であるが、この話の中に現れてゐる無私・愛・忠誠の感情は不滅である。讀者はその美に打たれて、話の筋の架空なことなどは忘れてしまつて、たゞ永遠の眞理を見るのみである。

傑作の何物たるかは、これで理解されたらうと思ふ。

次にかういふ傑作の中から、自分のためには何を選定したらよいか。先年英國の科學者ラボックが世界名著百篇の目錄を公にしたことがあつた。その百篇を或書肆が廉價本にして出版した。すると他の文學者にも、これに倣つて、各〻信ずるところに從つ

ラボック　英國の科學者。（一八〇一―一八六五年）

て、他の百の名著を選出するものが出た。それからもう大分時が經つて、その企ては何の役にも立たなかつたことが分つて來た。この叢書を購つた人は多いだらうが、讀んだ人は殆どない。これはラボックの選擇が惡いのではなく、一人の人が銘々異なつた心をもつてゐる多數の人の讀書の課程を決めるといふことが無理だからである。ラボックは自分に最も感銘の深かつた書物を擧げたに過ぎない。他の文學者がやつたら、きつと彼のとは違つた目錄を作つたらうと思ふ。書物の選定は、如何なる場合にも個人的でなければならない。約言すれば、諸君は自分の考へによつて、自分で選定しなければならない。いづれの方面の文學にも傾倒し得るやうな性格の人は、滅多にあるものではない。普通からいへば、題目を自分の生まれつきの才能や傾向にしつくり合

つた狹い範圍に限る方が得策である。吾々の性格を知り盡くし、それに十分の同情をもつてゐてくれない限り、他人に吾々の天分が奈邊にあるかを定めて貰ふわけにはゆかない。併し、こゝに一つ容易に出來ることがある。それは先づ第一に、今までどんな題目が一番自分に氣に入つたかを決定することである。第二にその題目のものでは何が一番良いかを決定し、次には、同じ題目を取扱つてゐると稱してはゐるが、未だ大批評家や大公衆に定評のない場當りの下らないものは除外して、最良のものに沒頭することである。

しかし、さういふ定評のある書物は澤山にはない。希臘文明を除いては、各文明は第一流のものは二三册づつしか生み出してゐない。凡ての大宗教の教理を書いた經典は、文學的にも第一流に位する。なぜならば、それは彫琢に彫琢を重ねて、その國語では出來得る限り立派なものにされて來たからである。諸民族の理想を表現した敍事詩も亦第一流に價する。第三には、人生の反映としての戲曲の傑作も、最高の文學に入れてよい。しかし、かういふ書物は決して多くはない。優秀なものはダイヤモンドのやうなもので、さうざらにはない。

讀書について述べたいことはほゞ盡くしたと思ふから、最後に、私は年若い讀者に與へられた、陳腐ではあるが、非常にすぐれた格言を繰り返したいと思ふ。

「新刊書の出版を聞く毎に、古い書を讀め。」

（田部隆次譯「小泉八雲全集」に據る）

大町桂月
名は芳衛。文學者。高知縣の人。大正十四年歿、年五十七。
花園神社
東京市四谷區三光町にある。

二　田園雜興

大町桂月

みづから世を避けて門を鎖すとにはあらねど、片田舎に住めば、來り訪ふ者おのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街を離れて一宇の茅屋建てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後ろに竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、その間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。

大町桂月

われ年來病軀を抱けり。我が志を伸ばさんには、まづ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到り及ばず。啻に我が心に適するのみならず、亦我が體に適するを以て、居をこゝに定めぬ。都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒跳び來りて我が手の風呂敷包に取縋る。例として土產の菓子あらんことを期するなり。さるにても、我が志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ愧づかしけれ。

蒸暑き夏の夕べ、涼臺を無花果樹下に移して、一家晩餐に團欒すれば、竹葉そよぎて涼氣おのづから盤上に迸る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。今ひとつ、一匹の犬いつも食時を違へず來りてかしこまる。これ近隣の家に飼へるものなり。その主人、近頃、妻子を殘して病死せり。喪家の狗の譬ひ、

思ひ出されてあはれなるまゝに、殘肴を投げ與ふるを常とすれど、貧家の廚、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、たゞ鼻先に嗅ぎたるのみにて、悄然として立ち去るこそ氣の毒なれ。

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、清水湧出でて、流れて田に注ぐ。もとは朽木中に滿ちて、蛙やゐもりの棲處となり、岸には雜草おひ茂りて、見るかげもなかりしが、草を刈り、朽木を取りのけ、ゐもりを捕へ出すこと八九十に及び、水始めて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙・ゐもりのみと思ひの外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて泳ぎめぐり、人の足音聞きては穴深く潜みゆく。大兒と中兒とこれを見て興がり、今少し鯉を入れよといふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黑や、碧水に一種の模樣を畫が

き、或は集り、或は散じ、時には水面に喰喁し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋上に立ちて、これを眺め、これに餌をやること、兒にとりてはこの上もなき慰みなり。

おぼつかなげにとゝと呼びて、雞に餌を與ふることも、亦小兒が慰みの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで來り集り、先を爭うて食ふ。雄三羽、雌七羽あり。種類も一ならず。就中「しやも」の雌一羽、最も慓悍なり。餌を貪ること最も甚しく、近寄るものの頭を嘴にてつゝくさま、如何にも憎さげにて、他の雞恐れて敢へて近寄らず。されど最も大いにして良き卵を生むは、この「しやも」なり。

われ平生物累ひなきことを期す。身には惜しき物を帶びず、家にも惜しき物を置かず、身邊の物品、すべて用を便ずるを以て足

蜀を望む
「隴を得て蜀を望む。」（後漢書）

れりとす。一室の中、粗末なる机と書物との外には、又他の物なし。雞遠慮なくも座に上がり來り、机上に立ちて啼くことあり。護謨靴穿きて庭に遊べる小兒、いつの間にやら靴のまゝ上がり來ることもあり。されど雞上がらば追ふべきものと心得て、おのれは靴のまゝ上がり居りながら、兩手ひろげて雞を追ひだすも、いとあどけなし。その末の兒は未だろくに口もきけぬばかりの年頃なり。母の乳に飽けば、をり〳〵我が机邊に來る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。餘りにおとなしきに、不圖心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹せることあり。

夕闇の端居に、裏の田より竹林を越して、二つ三つの螢飛びくるを見て、あれ捕へてよと兒のいふまゝに、これを捕ふれば、蜀を望むのならはし、田に行きて多く捕へてよと請ふ。田に行けば螢多し。忽ちの間に數十匹捕へつ。俄づくりの螢籠に入れて打興じたる兒等も、やがて蚊帳の中に入り、枕邊の螢光いよ〳〵涼し。

園中兒を喜ばしむるものは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。これ等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見ればたゞ嬉しきなり。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、初はその愛すべきを覺え、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等かの神異の潜めるが如く思はる。而して小兒は人類の中にも、最も自然に近きものなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれはおのづから知らるべくや。

樂しき我が團欒にも、なほ一朶の愁雲たなびく。そは我が胃腸

の病なり。母や齢古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、われと相住むことも前後僅に十餘年に過ぎず。末年、われと相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の如きか。然るに我が病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なるを氣づかひ、我が食少きを心配す。されば「そ「親を思ふ心にまさる親ごころ」と詠じけめ。世に、子の病ばかり親の心を痛ましむるものなし。罪深きかな。抑、不孝の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名ゆゑ、われは親ゆゑに強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さへものするに至りぬ。食進むやうになりて嬉しとて、母の喜ぶさま見るにつけても、おぼえず涙ぐまれしこと幾度ぞや。（桂月全集）

親を思ふ　「親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれなにと聞くらむ」（吉田松陰）

廉頗　支那戰國時代の趙の武臣。

三　すがの荒野

賀茂眞淵　國學者。遠江國の人。明和六年歿、年七十三。

本居宣長　國學者。伊勢國の人。享和元年歿、年七十二。

加藤千蔭　國學者。江戸の人。文化五年歿、年七十四。

村田春海　國學者。江戸の人。文化八年歿、年六十六

信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな　賀茂眞淵

ふけゆくも知らで文見るよるゝはねぬにおどろくあかつきの鐘　本居宣長

すみだ川蓑著てくだすいかだ師に霞むあしたの雨をこそ知れ　加藤千蔭

村田春海

清水濱臣
國學者。江戸の人。文政七年歿、年四十九。

中島廣足
國學者。肥後國の人。元治元年歿、年七十三。

小澤蘆庵
名は玄中。歌人。尾張國の人。享和元年歿、年七十九。

香川景樹
歌人。因幡國の人。天保十四年歿、年七十六。

こゝろあてに見し白雲はふもとにて思はぬ空に晴るゝ
富士の根　清水濱臣

遣水にながるゝ月のかげとめて夜聲すゞしくなく水雞
かな　中島廣足

星祭る庭のともし火またゝきてふくる夜すゞし秋の初
風　小澤蘆庵

大井川月と花とのおぼろ夜にひとりかすまぬ波の音か
な　香川景樹

松平定信
白河城主。文政十二年歿、年七十二。

僧良寛
歌僧。越後國の人。天保二年寂、年七十四。

平賀元義
歌人。備中國の人。慶應元年歿、六十六。

大隈言道
歌人。筑前國の人。明治元年歿、年七十一。

召せや召せゆふげの妻木召せや召せ歸るさとほし大原
の里　松平定信

うづみ火のあたりのどかにはらからのまどゐせし夜ぞ
こひしかりける　僧良寛

山かげの岩間をつたふ苔水のかすかに我はすみわたる
かな　平賀元義

たゞむかひ今も見るごとよろづ代にかはらずいませた
ふとき我が母　大隈言道

よそよりも夏になりぬるほど見えて明けはなちたる川づらの宿　井上文雄

冬がれの垣根にまとふ梅もどきあさりつくしてひよどりのなく　橘曙覽

羽ならす蜂あたゝかに見なさるゝ窓をうづめて咲くさうびかな　太田垣蓮月

宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花のした臥し

井上文雄　歌人。江戸の人。明治四年歿、年七十二。

橘曙覽　歌人。越前國の人。明治元年歿、年五十七。

太田垣蓮月　名は誠。歌人。京都の人。明治八年寂、年八十五。

年立ちかへり　養和元年。

母　祐泰の死後、曾我に再嫁した。

曾我殿太郎祐信。

四　空行く雁

（曾我物語）

普通に行はれてゐる曾我物語は十二卷から成つてゐる。室町時代の初に僧侶の手によつて作られたものらしい。曾我兄弟の壯烈な復仇談を歴史小説のやうに綴つたもので、義經記と並んで後の文學に多くの材料を與へて

新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。

ある夕ぐれ、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は何國にましますぞや。往きてをがみ奉らばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたる來し方も、今さら思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が

工藤左衛門尉祐經。鎌倉殿源頼朝。

この里神奈川縣足柄下郡曾我中村。

父にてあれ。」と、心づよく語らひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王かさねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一萬とやらに射られ、死に給ひぬと、兄御前は語らせ給ふぞや。當時、鎌倉殿の憑み者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。われらをも殺さんとや思ふらん。われらがこの里に在りと知らでや過ぐらん。」など、おとなしく語りければ、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて、夏も過ぎ秋も闌け、九月十三夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたるかりがねの、南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶ翼も皆別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、

河津三郎祐泰といふ。

一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父にてましまさぬこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜はり、弓・矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。われらより幼きものにても、馬・鞍・弓矢をもて、物を射ありくことの羨ましさよ。これ等の事ども思ひつゞくれば、いつより今宵は父御前の戀

繪本曾我物語挿畫

ひしくおはしますぞや。」とて、袖に顔をさし入れて、さめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔を合はせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上郎達、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」と怖ろしげにいひければ、二人のものは門外へ逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにけり。

或時、兄弟は竹の小弓に、薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人はたち向かひ、あなたこなたへ射通して、一萬、箱王に申しけるは、「われらもいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はん。弓矢は

伊東入道祐親。
千鶴母は祐親の女。
松河が淵静岡縣田方郡伊東にある。
左衞門尉祐經。
石橋山治承四年八月の合戰。石橋山は神奈川縣足柄下郡にある。
土肥同郡土肥の山谷。石橋山の南。

男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟もうちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと、人々思ひけり。

一萬が乳母、この由を聞き知りて大いに驚きて、母にかくと申しければ、母も大いに仰天し、二人の子どもをよび寄せ、泣く〳〵語られけるは、「まことか、おのれ等が、さも怖ろしき謀叛を起さんと議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれ等かゝる謀叛人の孫なれば、敵左衞門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千度百度悲しむともかなふべきか。その上、汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してとゞまりたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戰にうち負けて、土肥の杉

梶原景時　頼朝の寵臣。

山へ入らせ給ひし時、梶原景時と、曾我殿と、二人心を合はせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆返しまゐらせて、二人の幼き者どもを助けて給はらんと申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、「それほどの志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ。」と仰せられける故にこそ、汝等も安穏にて今まで稀有の命を保ちたるなれ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば、生々世世にも報じつくすべきか。鳥類・畜類にても恩を知るとこそ聞け。況や、汝等人倫においてをや。然るを却つて曾我殿に歎きを與へんこと、返すがへすも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、速に謀叛をとゞむべし。」と口説きたてて誡められければ、二人の子供も、目と目とを見合はせ、顔うち赤めて立ちにけり。

元暦元年　後鳥羽天皇の御宇。

五　宇治河の先陣

（源平盛衰記）

源平盛衰記四十八巻は、鎌倉時代の中頃に成つたものらしいが、作者は不明である。平家物語の内容と略〻同様の事を詳密に記してある。けれども、平家物語のやうに語り物として傳はらず、讀物として傳はつたために、その文章には聲調の美を缺いてゐる點が多い。

元暦元年正月二十日、大手・搦手、宇治・勢多に著く。九郎義經、河端におし寄せ見給へば、橋板を破り取つて、向ひの岸に垣楯に搔き、櫓に構へたり。水は嵩増して底見えず。その上、亂杙・逆茂木隙なく打つて、大綱・小綱引張りて流し懸けたれば、鴛・鴨などの水鳥も、輒く潜り通るべしとも見えざりけり。河の端、分内狹くして、打臨みたる者四五千騎には過ぎず。二萬餘騎は寄りつくべき處なくし

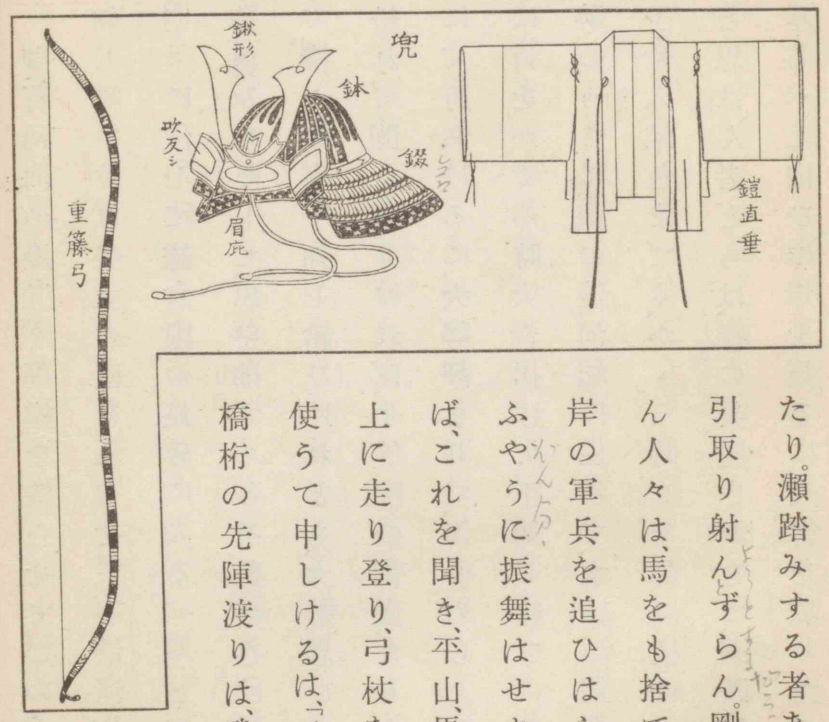
て、たゞ徒らに後陣に控へたり。

河の様をも見ず、橋を引きたるも知らぬ者のみ多ければ、渡るべき評定にも及ばざりけり。御曹司は、雑色・歩走の者どもを集めて、「家々の資財・雑具、一々取りださせて、河端の在家を悉く焼拂ひ、大勢を一處に集むべし。」と下知し給ふ。この由走り散つて罵りけれども、かねて山林に逃げ隠れたりければ、家々には人もなし。この上は手々に續松をさし上げて、宇治の在家を焼拂ふ。行歩にかなはぬ老者・少者ども、さりともと忍び居たりけれども、猛火に焼け死に、たま〳〵遁れ出でたれども、馬・人に踏み殺さる。まして牛・馬の類ひは助くる者もなければ、その數を知らず焼け死にけり。「風吹けば木安からず。」とは、かやうの事なるべし。廣々と焼拂ひたりければ、二萬五千餘騎殘る者もなく、河端に打臨みたり。

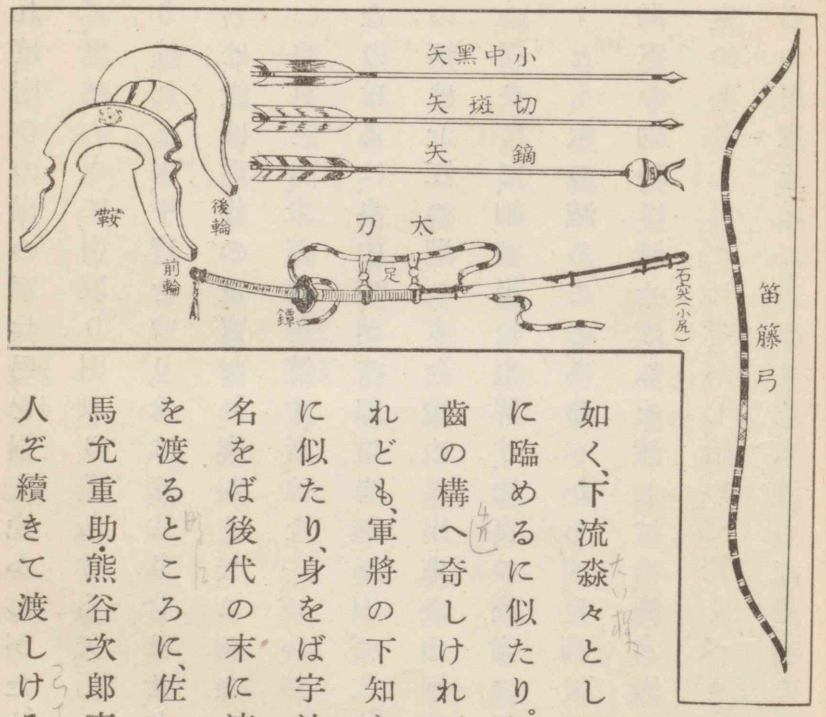
御曹司 源義經。時に年二十六。

御曹司、河の邊近く高櫓を造らせて、この上に登つて四方を下知し給ひけり。矢立の硯を取寄せて、「宇治河先陣と剛者とを、次第明々に注して鎌倉殿の見參に入るべし。」と仰せられければ、軍兵各勇みをなして、忠を抽でんとぞ色めきける。御曹司は櫓の上にて、様々の事下知し給ひけれども、大勢思ひ〳〵にとゞめきて、打紛れて聞えざりければ、平等院の御堂より太鼓を取寄せ、櫓の下にて打ちけるに、大勢靜まりて、何事やらんと、鳴りを靜めて軍將に目をかくる時、大音揚げて下知し給ひけるは、「二萬五千餘騎の勢のうちに、海の邊、河端に住みて、水練の輩多かるらん。郎等・家の子・舍人・雑色までも、かゝる時こそ群に抜けたる高名をもすれ。我と思はん者どもは、物の具脱ぎおきて、瀬踏みして河の案内を試みるべし。向ひの岸を見るに、矢筈を取りたる者四五百騎と見え

鎌倉殿 源頼朝。



たり。瀬踏みする者あらば、定めて引取り引取り射んずらん。剛座に卽かんと思はん人々は、馬をも捨て、橋桁を渡り、向ひの岸の軍兵を追ひはらつて、水練の輩を思ふやうに振舞はせよ。」と下知せられければ、これを聞き、平山、馬より飛降り、橋桁の上に走り登り、弓杖を突き、扇はら〳〵と使うて申しけるは、「二萬五千餘騎の中に、橋桁の先陣渡りは、武藏國の住人平山武者所季重といふ小冠者なり。」とぞ名乘りける。



抑、當河の有樣、深淵潭々として巨海の波に浮かべるが如く、下流淼々として瀧水の漲り落つるに臨めるに似たり。虹の橋桁危うして、雁齒の構へ奇しければ、渡り得んこと難けれども、軍將の下知を背くは命を惜しむに似たり、身をば宇治河の底に沈むとも、名をば後代の末に流さんとて、平山これを渡るところに、佐々木太郎定綱・澁谷右馬允重助・熊谷次郎直實・子息直家、已上五人ぞ續きて渡しける。矢比も近くなりた

れば、向ひの岸の軍兵、弓を強く挽かんがために、わざと兜を脱いで、思ひ〳〵に、引取り引取り發ちける矢、雨の脚の如くに飛び來りけれども、甲冑をゆり合はせ、ゆり合はせ、矢間をたばひて振舞へば、鎧は重代の重寶なり、裏かく矢こそなかりけれ。

されども、未だ河を渡す者はなし。「いかがあるべき。」と評定樣々なりけるに、畠山庄司次郎重忠進み出でて申しけるは、「事新しこの河は近江の湖の末、今始めて出來たる河にあらず。春立つ日影の習ひにて、細谷川の氷解け、比良の高嶺の雪消えて、水の嵩は增すとも、水の減ることあるべからず。足利又太郎忠綱も、高倉宮の御軍の御時に、渡せばこそ渡しけめ。鎌倉殿の御前にて、さしも評定のありしはこれぞかし。始めて驚くべきことにあらず。豫ての馬の用意そのことなり。重忠渡して見參に入れん。」といふところに、平等院の小島が崎より、武者二騎驅けいでたり。梶原源太と佐佐木四郎となり。

畠山　時に年二十一。

比良　滋賀縣滋賀郡にある。

高倉宮　治承四年五月、源頼政、以仁王（高倉宮）を奉じて平氏を討つ。

景季が裝束には、木蘭地の直垂に、黑革縅の鎧に、三枚兜の緒をしめて、重籐の弓の中を把り、二十四さいたる小中黑の矢負ひ、鍊鐔の太刀佩いて、鎌倉殿より賜はりたる磨墨といふ名馬に、黑塗の鞍置いて騎つたり。高綱は褐の直垂に、小櫻を黃に返したる鎧に、鍬形打つたる兜に、笛籐の弓の眞中把り、二十四さいたる石打の征矢頭高に負ひ、嚴物造りの太刀佩いて、これも鎌倉殿より賜はりたる生嗟に、黃覆輪の鞍置きてぞ騎つたりける。

誰か先陣と見るところに、源太颯と打入りて、遙かに先立ちけり。高綱いひけるは、「いかに源太殿、御邊と高綱との外に人なければかく申す。殿の馬の腹帶は以ての外にゆるまつて見ゆるもの

かな。この河は大事の渡りなり。河中にて鞍踏み返して、敵に笑はれ給ふな。」といひければ、さもあらんと思ひて、馬を止め、鐙踏ん張り立ち上がり、弓の弦を口に銜へ、腹帶を解いて引詰め引詰めしける間に、高綱さつと打ち渡して、二段許り先立ちたり。源太騙られけりと、安からず思ひて、これも打ち浸して渡しけるが、馬の足綱に懸りて思ふやうにも渡されず。高綱は究竟の逸物に騎りたれば、宇治河早しと雖も、淵・瀬をいはずさゞめかして曲に渡し、向ひの岸近くなりて、高綱が馬綱に懸つて、足をさと歩み除けければ、元より期することなれば、太刀を拔き、大綱・小綱三筋さと切り流し、向ひの岸へ打上がり、鐙踏ん張り、弓杖突いて、「佐々木四郎高綱、宇治河の先陣渡したりや。」と、名乘りも果てぬに、梶原源太も流れ渡りに上がりにけり。

太平記
四十巻。後醍醐天皇の御宇を中心にした前後凡そ五十年間の戰記物語。作者不明。

大塔宮
護良親王を申す。

笠置
京都府相樂郡加茂村の東にある山。

般若寺
奈良市般若阪（今の奈良阪）の南にある寺。

笠置の城既に落ち
笠置の落城は元弘元年九月十八日のことであつた。

主上
後醍醐天皇を申す。

一乘院
一乘院は奈良にあつた。今廢す。

六　熊野落

（太　平　記）

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞し召されんために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む怖れ、御身の上に迫りて、天地廣しと雖も、御身を隱さるべき處なく、日月明らかなりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻に彳みて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、何處とても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫しはと思し召されけるところに、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。折ふし宮に附き奉りたる人一人

大般若　大般若經。大般若波羅密多經の略。六百卷。唐の玄奘三藏の譯。

もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵既に寺内に打入りたれば、紛れて御出であるべき方もなし。さらばよし自害せんと思し召して、既におし肌脱がせ給ひたりけるが、事協はざらん期に臨みて、腹を切らんことはいと易かるべし、もしやと隱れて見ばやと思し召し反して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋を開けず、一つの櫃は御經を半ば過ぎ取り出して蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃の中へ御身を縮めて伏せさせ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。もし搜し出されなば、やがて突立てんと思し召して、氷の如くなる刃を拔きて御腹にさし當て、兵「こゝにこそ。」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の

中、おし量るもなほ淺かるべし。

さるほどに、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも、殘る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開けて御經を取り出し、底を翻して見たれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命を繼がせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、もしまた兵立ちかへり、委しく搜すこともやあらずらんと御思案ありて、や

古刊本挿繪

玄奘三藏
唐の名僧。

がて前に兵の捜し見たりつる櫃に入り代らせ給ひてぞおはしける。案の如く兵どもまた佛殿に立ちかへり、前に蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なしとて、御經を皆うち移して見けるが、から〳〵とうち笑ひて、「大般若の櫃の中をよく〳〵捜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。」と戯れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。これひとへに摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護に依る命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

かくては、南都邊の御隱家も協ひ難ければ、乃ち般若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御伴の衆には、光林房玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河房・武藏房・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御伴

の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外に出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて協はせ給はじと、御伴の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねど、怪しげなる單皮（たび）・脚巾（はばき）・草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤め懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

古刊本挿畫

由良の湊　淡路の東岸。藤代・和歌・吹上・玉津島　共に和歌山縣海草郡にある。

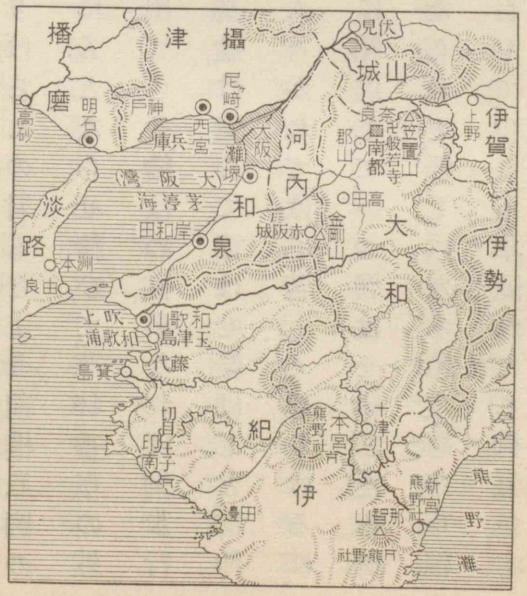
雨を含める　「孤村の樹色殘雨に昏く、遠寺の鐘聲夕陽を帶ぶ。」（唐、盧綸）

切目の王子　切目は切部にも作る。和歌山縣日高郡切目村。

三所權現　熊野にある本宮・新宮・那智の三權現。

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の揖緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌・吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。

その夜は、叢祠の露に御袖をかた敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけるは、「南無歸命頂禮三所權現、滿山護法十萬の眷屬、八萬



十津河　奈良縣吉野郡南部の地。

の金剛童子、垂跡和光の月明らかに、分段同居の闇を照らし、逆臣忽ちに亡びて、朝廷再び輝くことを得しめ給へ。傳へ承る、兩所權現はこれ伊弉諾・伊弉册の應作なり。わが君その苗裔として、いま朝日忽ちに浮雲のために隱されて冥闇たり。豈傷まざらんや。玄鑒空しきに似たり。神若し神たらば、君何ぞ君たらざらん。」と、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤め、感應などかあらざらんと、神慮も暗に計られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、鬘結ひたる童子一人來つて、「熊野三山の間は、なほも人の心不和にして、大義成りがたし。これより十津河の方へ御渡り候ひて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け參らせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申

すと御覽ぜられ、御夢は卽ち覺めにけり。これ權現の御告げなりけりと、賴もしく思し召されければ、未明に御悅びの奉幣をさゝげ、やがて十津河を尋ねてぞわけ入らせ給ひける。

その道のほど三十餘里が間には、絕えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を敬て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴きを忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の靑壁刀に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めたり。數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、御身も草臥れ果てて、流るゝ汗水の如し。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御伴の人々も、その身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はか〴〵しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を引きて、路のほど十三日に十津河へぞ著かせ給ひける。

山路もとより
「山路元雨無し、空翠人衣を濕す。」（唐、王維）
萬仞の靑壁
「山復山、何の工か靑巖の形を削り成せる。水復水、誰が家か碧潭の色を染め出せる。」（大江澄明）

近松半二
淨瑠璃作者。大阪の人。天明三年歿、年九十九。

普陀落
西國三十三所巡禮札所の第一番、和歌山縣那智山靑岸渡寺の御詠歌。

きみゐ寺
西國三十三所巡禮札所の第二番、和歌山縣海草郡紀三井寺山護國院金剛寶寺。

七　巡　禮

近松半二

「普陀落や岸打つ波はみ熊野の那智のお山に響くたきつ瀨。」年はやう〳〵とほ〴〵の、道をかけたる笈摺に「同行二人。」と記ししは、一人は大悲の蔭賴む、故里を遙々こゝにきみゐ寺、花の都も近くなるらん。「巡禮に御報謝。」といふも優しき國訛。「てもしをらしい巡禮衆。どれ〳〵報謝進ぜう。」と、盆にしらげの志。「あい〳〵、有り難うござります。」といふ物越しから爪はづれ、可愛らしい娘の子。「定めて連れ衆は親御達。國はいづく。」と尋ねられ、「あい、國は阿波の德島でござります。」「むゝ、何ぢや、德島。さつても、それはまあ懷かしい。わしが生れも阿波の德島。そして、父樣・母樣と一緒に巡禮さんすのか。」「いえ〳〵、その父樣や母樣に逢ひたさ故、それでわし一人西

國するのでございます。」と、聞いてどうやら氣にかゝる。

お弓はなほも傍に寄り、「むゝ、父様や母様に逢ひたさに西國するとは、どうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ、その親達の名は何といふぞいの。」「あい、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に、父様や母様も、わしを祖母様に預けて、何處へやら往かしやんしたげな。それでわしは祖母様の世話になつて居たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見たい。それで方々尋ねて歩くのでございます父

巡　禮（栗原玉葉筆）

夫婦は今にも主君の重寶國次の名刀の紛失したのが元である。

様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します。」と聞いて惚り、お弓は取附き、「これ〳〵、あの父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて祖母様に育てられてゐたとは、疑ひもない吾が娘。」と、見れば見るほど幼顔、見覺えのある額の黒子。やれ吾が子か、懷かしやと、いはんとせしが、いや、待てしばし、夫婦は今にも取らるる命、元より覺悟の身なれども、親子といはば、この子にまで、どんな憂目がかゝらうやら、それを思へば、なまなかに名乘りだてして憂目を見んより、名乘らでこのまゝ歸すのが、却つてこの子のためならんと、心を靜め、よそ〳〵しく、「おゝそれはまあ〳〵、年は、も行かぬに、遙々の處をよう尋ねに出さしやつたなう。その親達が聞いてなら、嘸嬉しうて嬉しうて飛立つやうにあらうが、まゝならぬが世の憂き節、身にも命にも代へて、可愛い子を振棄て、國

を立ち退く親御の心、よく〳〵の事であらうほどに、むごい親と、必ず必ず恨まぬがよいぞや。「いえ〳〵、勿體ない。何の恨みませう。恨むる事はないけれども、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘處の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寢やしやんすを見ると、わしも母様があるなら、あのやうに髪結うて貰はうものと、羨ましうござんす。どうぞ、早う尋ねて逢ひたい。ぴよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす。」と、泣いじやくりするいぢらしさ。

母は心も消え入る思ひ。「さても〳〵世の中に、親となり子と生まるゝほど深い縁はなけれども、親が死んだり、子が先立つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方もどれほど尋ねても、顔も處も知らぬ親達。逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、國へ往んだがよいわいの。」「いえ〳〵、戀ひしい父様や母様、たとひ何時までかゝつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は、一人旅ぢやてて、何處の宿でも泊めてはくれず、野に寢たり、山に寢たり、人の軒の下に寢ては擲かれたり、こはい事や悲しい事。父様や母様と一緒にゐたれや、こんな目には逢ふまいものをどこにどうしてゐやしやんすぞ。逢ひたい事ぢや。」逢ひたいと、わつと泣きだす娘より、見る母親はたまりかね、「おゝ道理ぢや、可愛や、いぢらしや。」と、我を忘れて抱きつき、前後正體なげきしが、これほど親を慕ふ子を、何とこのまゝ往なされう。いつそ打明け、名乘らうか。いや〳〵、それでは、この子も同じ罪。その時の悲しさを思ひ廻せば、往なすがためと、「おお、段々の樣子を聞き、吾が身のやうに思はれて、悲しいとも情ないとも、いふにいはれぬ事ながら、とかく命が物種。まめでさへゐ

とむない　「む」は「も」の訛。

れや、また逢はれまいものでもない。これ、仕つけぬ旅に身を痛め、煩ひでも出れや悪い。何處を證據に尋ねうより、その祖母様の方へ往んでゐるとの、追つつけ父様や母様が逢ひにいてぢやほどに、悪い事はいはぬ、思ひ直して、これから直ぐに國へ往んで、隨分まめで、親達の尋ねて行かしやるのを待つてゐるのがよいぞや。」と、宥め賺せば、聽きわけて、「あい〳〵、忝うございます。お前がそのやうにいうて泣いて下さりますによつて、どうやら母様のやうに思はれて、わしや此處が往にとむないどんな事なと致しませうほどに、まうしお家様、お前のお傍に、いつまでもわたしを置いて下さりませ。」「えゝ、悲しい事いひ出して、また泣かすのかいのさつきにから、わしも子のやうに思うて、こゝに置きたい、往なしとむないと、様々思ひ廻せども、此處に置いてはどうも爲めにならぬ事があるによつて、それでつれなう往なすのぢやほどに、聽分けて往んだがよいぞや。」といひつゝ内へ、針箱の底を探して豆板の、まめなを悦ぶ餞別と、紙に包んで持つて出で、「これ、なんぼ一人旅でも、たんと錢さへやれや泊める。僅なれども志。この銀を路銀にして、早う國へ往にや。必ず必ず煩うてばしたもんな。」と、銀を渡せば、おし戻し、「嬉しうござんすけれど、銀は小判といふものを、たんと持つて居ります。そんなれやもう參じます。忝うございます。」と、泣く泣く立つを引留め、「それはさうでも、これは私が志。」と、無理に持たして、塵打拂ひ、「これ、もう往にやるか。名殘が惜しい、別れとむない。これ、今一度顔を。」と引寄せて、見れば見るほど胸迫り、離れがたなき憂き思ひ。それと知らねど誠の血筋、名殘惜しげに振返り、「何處をどうして尋ねたら、父様や母様に逢はれる事ぞ。逢はし

父母のめぐみ　西國三十三所巡禮札所の第三番補陀落山施音寺の御詠歌。この寺は和歌山縣那賀郡粉河町にある。

てたべ、南無大悲の觀音樣。『父母のめぐみも深き粉川寺、佛の誓ひ頼もしきかな。』泣く泣く別れ行く。跡を見送り伸びあがり「これ、いま一度こち向いてたも。」折角長の海山越え、艱難してあこがれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら、名乘らでいなす母が氣は、どのやうにあらうと思ふ、狂氣半分、半分は死んでゐるわいの、まだ生ひ先のある子をば、親ゆゑ路頭に立たすかと、そのままそこにどうと伏し、消え入るばかり歎きしが、起きなほつて涙を抑へ、「いや〳〵、どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふことはならぬ身の上。たとへ難儀がかゝらばかゝれ、又その時は夫の思案。ほどは行くまい追附いて、連れて戻らう。さうぢや、さうぢや。」と、子に迷ふ道は親子の別れ道、跡を慕うて尋ね行く。（阿波の鳴門）

佐佐木信綱　文學博士。歌學者。三重縣の人。帝國學士院會員。

八　旅と歌と

佐佐木信綱

旅行の樂しみは、想像しただけでも人の心を魅了しないでは措かない。殊に益複雜繁忙になつて行く大都會に生活してゐる人々にとつては、旅行は何にも增した慰めである。心を本當に落著かせる遑のない實生活から暫く離れて、自然の中へ人込めば、それだけで、もう人の心は新鮮な刺戟に蘇つて來るのを感じるであらう。この潑剌とした心持を味はふだけでも、旅行は十分喜ばれる價値をもつてゐる。まして、そこには未知の物を始めて探る喜びや、自分だけの氣持を樂々と味はふことの出來る心安さも加つてゐる。その上、史跡や名勝や、珍奇な風俗や言語などが、遠く家を離れて旅に出たといふ感じを深くするので、人の心は自

萬葉集
奈良朝時代の歌集。二十卷。

能因
俗名橘永愷。歌僧。平安朝末期の人。

西行
俗名佐藤義清。歌僧。建久元年寂、年七十三。

宗祇
姓は飯尾。連歌師。文龜二年歿、年八十二。

芭蕉
名は松尾宗房。俳人。伊賀國の人。元祿七年歿、年五十一。

ら曇なく淨められて、すなほな氣持で、目に觸れ耳に聞くところの物を懷しむことが出來るのである。

それにつけても、昔の旅を今でも想像させる「草枕」といふ言葉が、しみ〴〵思はれる。今こそ交通機關や旅宿などが發達してゐるけれども、徒歩でか、馬の背でかしか旅することの出來なかつた昔の旅行では、「かれいひ」を準備したり、或は萱を刈り敷いて露けき假寢をしたりなどした苦しみも、歌の詞の上での遊戯でなく、本當にさうあつたのである。それにも拘はらず、遠い昔から、旅を喜び、旅に憧れた人たちは、どんなに多かつたことであらう。歌の方面だけに限つて見ても、既に萬葉集にさへ旅の感懷を詠じたのが澤山にある。遙かに下つては、能因も旅を喜び、西行も旅から旅へとその一生を暮らした。宗祇や芭蕉なども旅とは離せな

秀衡
姓は藤原。鎭守府將軍。文治三年歿。その屋敷は今の岩手縣西磐井郡平泉村にあつた。

い因緣をもつてゐる。西行が夏に畿內を發足し、鎌倉を通つて、秀衡の屋敷に著いた時には、もう雪が降りしきる頃となつてゐた。何物かに浮かされるやうな心持で旅立つた芭蕉も、何時再びわが草庵へ歸り著くやら覺束なかつた。そんなにしてまでも、昔の人は不便な旅を捨て難く懷しんだのである。

旅は心の故郷へ人を誘つて行く。さうして人の心を不思議なほど解きほごして子供にし、感じ易くする。旅に淨められた人の心は、皆ひとかどの歌人の心になつてゐる。歌を詠む人は、平素にも增して、すなほな純情な歌を詠むことが出來、歌を詠まない人の心も、聲を放つて歌ひたいやうな、子供心に立返つて來るのである。

歌を詠む人は旅の途上の感懷を一首の短い歌に託して、永遠

の記念碑を此處彼處に建てて來る。それは尊い道標であり、これを建てる喜びは人生に於ける最大の喜びの一つである。鑑賞も出來、創作も出來る人は、旅するにつれて、荒れた曠野にでも、雲のかゝつた峰にでも、如何なる處にでも、自分から心の記念碑を建てて行く。たとひ創作をしない人でも、旅に心を慰めるほどの趣味と鑑賞力とのある人ならば、自分が今辿りつゝある山や林や海岸などについて、わが心に訴へるやうな名歌の存する時には、それに育まれて一入の喜びを感じることも出來るであらう。かやうに、旅は人の心を淨め、おしなべて人を詩人としてくれる。であるから、歌を詠む人は一層歌人となり、歌を詠まない人でも、歌はないでゐられないやうな純な心持になる。

人の心は、生きてゐる限り、純なものでありたいゆたかな感情

や、萬物に對する愛情や、現實生活に馳驅してゐても汚れない高貴善良な優美性や、それ等のものは何時まで經つても失ひたくない。しかも我々の生活にあつては、とかく餘り繁雜な現實生活のために、この好い心根が失はれがちである。西の國の或熱情の詩人が、「心鬱する時、野原に出でて空を眺め、木に親しみ、草を踏みて、我はわが心の純情を取返せり。」といつた喜ばしい言葉を、自分は宗祇や芭蕉などが旅に身を終へたことに引移して考へ、又現在の我々の上にも移して考へたいと思ふ。

このやうな意味で、旅と歌とは極めて深い關係を持つものであるといはなければならない。（旅と歌と）

初　瀬　（山本朝光筆）

九　長谷寺詣

幸田露伴

幸田露伴　名は成行。文學博士。東京の人。

長谷寺　奈良縣磯城郡初瀬町にある。

弓張月のやう〳〵光りて、入相の鐘の音もをさまる頃、西行は長谷寺に著きけるが、問ひ驚かすべき法の友もなきにはあらねど、問ひも寄らで觀音堂に參り上りぬ。

さなきだに、梢透きたる樹々をなぶりて夜の嵐の誘へば、はらはらと散る紅葉なんどの、空に狂ひて吹入れられつゝ、法衣の袖にかゝるもあはれに、また佛前の御燈明のめはじきしつゝ、よろづの物の黑み渡れるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何となく常よりは心も締りて、身に浸み渡る思ひのすれば、なほ誠を籠めて誦しゆくに、天も靜けく地も靜けく、人の全く靜まりたる、時といひ處といひ、相

應じてわが耳に入るはわが聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神なんどの、聲を和せて共に誦するかと疑はるゝまで、上なく殊勝に聞え渡りぬ。特に參りたる甲斐はありけり、菩薩も定めしかゝる折の、かゝる所作をば善しとして、必ず納受し給ふなるべし、今宵の心の澄みきりたる、この清々しさを何にたぐへん、餘りに有り難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがらこの御堂の片隅になり趺坐なして、曉がたになほ一度誦經しまゐらせて、さてその後、香華をも淨水をも供じて罷らんと、西行やがて三拜して御佛の御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か枯れし木の、動きもせねば音も立てず、寂然として坐しゐたり。

夜は沈々とやうやく更けて、風も睡れる如くになりぬ。左右に竝びて立ちたりける御燈明は、一つ消え、また一つ消えぬ。今はた

だいと高き吊燈籠の光、朦朧として力なきが夢の如くに殘れるのみ。この寺の僧どもは、寒氣に怯ぢて所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見する者なし。いふべき方も無く靜かなれば、日頃焚きたる餘氣なるべし、今薫ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかにおのづから匂ひを流すも、いとよく知らる。

かゝる折から、何者にか此方を指して來る足音す。御佛に仕ふるこの寺の者の、燈燭を續ぎまゐらせんとて來つるにやと打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むるとにはあらざれど、何としもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、この御堂に打向かひて、一度は

先づ拜み奉り、さて徐々と上り來りぬ。御堂は狹からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し、互のほどは隔りたり。此方を彼方は有りとも知らず、彼方を此方はよくも見得ねば、西行はたゞ我と同じき心の人もまた有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人あることを知らざれば、何に心を置くべくもなく、御佛の前に進み出でつ、いとつゝましげにかしこまりて、あまたたび合掌禮拜なし、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり、その心ばへの淺間ならぬも、夜深の參詣に測り得たり、衣の色さへ分ち得ざれば、面はまして見るべくはなけれど、淨土の同行の人なるものを、呼びかけて語らばや、名も問はばやと、西行は胸に思ひけるが、卒爾に物いはんは惡しかるべし、祈願の終つて後にこそと、心を控へてうかゞふに、彼方は數珠を取り出し、

さや〳〵とばかり擦りそめたり。

針の落つる音も聞くべきまで、物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の數珠を擦る音の定かなる響、いと冴えて神々し。御經は心に誦すると覺しく、萬籟絶えたるに、珠の音のみをたゞ緩やかに緩やかに響かす。その聲、或は明らかに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寐覺の枕の半ばは夢に、霰の音を聞くが如く、朝霧霽れぬ池の面に、蓮花の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友擦れか、山吹匂ふ山川の蛙鳴くかとあやまたれて、いとをかしくも聞きなさるれば、西行感に入つて在りけるが、期したるほどの事は仕果てしにや、その人數珠を收めて、御佛をば禮拜することあまたたびしつ、やをら身を起して退らんとす。菩提の善友、淨土の同行、契りをこの土に結ばんには、今こそ言

葉を懸くべけれと、

思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みておぼえずたまるわ
が涙かな

と、歌の調べは好かれ惡しかれ、西行俄に詠みかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、

「何と仰せられしぞ。今一度。」と、心を押鎭めて問ひかへす聞取りかねげんと猜するまゝ、

「思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて」と、再びいへば、後はいはせず、

「君にておはせしよ。こはいかに。」と、涙に顫ふおろ〳〵聲、言葉の文もしどろもどろに、身を投げ伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたもなき、そのかみの我が妻なり。

飽いて別れし仲ならず、子まで生したる語らひなれば、流石男も心動くに、まして女は胸逼りて、語らんとするに言葉を知らず、巖に依りたる幽蘭の、媚かねども離れがたく、たゞ露けくぞ見えたりける。西行きつと心を張り、徐ろに女の手を拂ひて、

「御佛の御前に亂がはしや。これは世を捨てたる痩法師なり。とらへて何をか歎き給ふ。心を安らかにして語り給へ。昔は昔、今は今、繰り言なのたまひそ。何事も御佛を賴み給へ。心とむべき世も侍らず。」と諭せば、女は涙にて、

「さてもなほ、我を世に立ち交らひて月日經るものと思ひ給ふか。燈火暗うはあれど、おほよそ姿・形にも猜し給へ。君の保延に家を出でて道に入り給ひしより、宵の鐘、曉の雞も聞くに悲しく、春の花、秋の月も眺むるにものうくして、片親なき兒の智慧敏きを

保延　崇德天皇の御宇の年號。

見るにつけ、胸を痛め心を傷ましめしが、所詮は甲斐なき歎きせんより、今生はさしおき、後世をこそ助らめと、娘を九條の叔母に賴みて、君の御跡を追ひまゐらせ、同じ御佛の道に入り、高野の麓の天野といふに、日頃行ひ侍るなり。さても君を放ち遣りまゐらせて、御心のまゝに家を出づるを得しめ奉りしそのかみより、我が兒を人に預けて、世を捨てたる今に至るまで、何れか世の常として悲しきことの限りならざらん。別れまゐらせし歳は、我が齡僅に二十歳を越えつるのみ。また幼兒を離しし時は、そが六歳と申すあどけなき折なり。老いて夫を先立つるにも、泣きて泣き足る例は聞かず。物いはぬみづ兒を喪ひても、心狂ふは母の情、それを行末長き齡に、君とは故もなくて別れまゐらせ、可愛き盛りに幼兒を見捨てつる悲しさは、如何ばかりと思す。されど、かばかり

天野　和歌山縣伊都郡の村。

の悲しさをも、女の胸に堪へ堪へて、鬼女・蛇神の如く過ぎ來つるは、我が悲みを悲みとせで、ひとへに君が歡びを我が歡びとすればなるを、別れまゐらせしより十餘年の今になりて、繰り言にてもいふもののやうに思はれまゐらせたる拙さ、情なさ。君は我がための知識となり給ひぬれば、恨み侍らざるばかりか、却りて悅びこそし奉れ。彼の世にてもあれ、君に遇ひまゐらせなば、君の家を出で給ひし後の我が上をも語りまゐらせて、よくぞ浮世を思ひ切りぬるとの御言葉をも得んとこそ、日ごろは思ひ設けたれ。別れ奉りし時は、今生に御言葉を賜はらんことも復有るまじと思ひたりしに、夢路にも似たる今宵の逢ふ瀨、幾年の心あつかひもいさゝか本意あることゝちして、うれしくこそ。」と、こまぐ〜と述ぶ。

徒然草　二卷。兼好法師の著。

折から燈籠の中の燈の香油は、今や盡きに盡きて、やがて消ゆべきひとあかり、ぱつと光を發すれば、朧氣ながら互に見る雜彩なき佛衣に裏まれて、蕭然として坐せる姿、修行に窶れ老いたる面ざし、有りし昔の影もなし。これが昔の妻か夫か、心根可愛や、懷かしやと、我を忘れて近寄る時、忽ちふつと燈は滅して、一念未生の元の闇に還れり。（「二日物語」に據る）

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒夷の恐ろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや。」と問ひしに、「一人も持ち侍らず。」と答へしかば、「さてはもののあはれを知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらんと、いと恐ろし。子ゆゑにこそよろづのあはれは思ひ知らるれ。」といひたりし、さもありぬべきことなり。（徒然草）

横井也有
名は時般。尾張侯の重臣。天明三年歿、年八十二。

漕ぎゆく舟
「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎゆく舟の跡の白波」（拾遺集、沙彌滿誓）

老蘇の森
滋賀縣犬上郡老蘇村にある。

一〇　鶉衣

横井也有

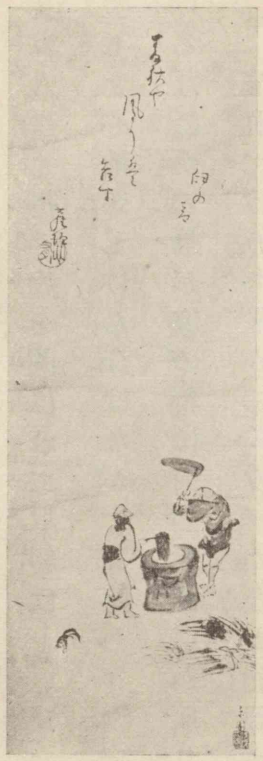
物忘翁傳

忘草生ふる住吉のあたりに、住みわびたる物忘れの翁ありさるは健忘などいへる病の筋にはあらで、たゞ身の愚かに生まれつきて、物覺えの疎かなるにぞありける。昔は經學の道をも問ひ聞き、作文・和歌の席などにも、誘ふ人あれば交らひけれど、聞くこと習ふことの、流石に面白しと思ふものから、夕べに覺えしことごとも、朝ぼらけには漕ぎゆく舟の跡なくて、身にも心にも殘ること少し。されば、これを書きつけ置かんと、強ひて硯ならし机によれば、春の日は蝶・鳥に心浮かれて過ぎ、秋の夜は蟲啼きていとねぶたし。かくてぞ老蘇の森の草、かりそめの人の約束も、小指を

麥秋や風には告げず臼の音
蘿隱

何がし僧正
「聞く度に珍らしければ時鳥いつも初音の心地こそすれ」（金葉集、永縁僧正）

結び手のひらに記しても、行く水に數かくはかなさ、人も笑ひて罪許しつべしされば翁のいへりける、「身の取り所なきを思ふに、若きに數まへられしほどは、人やりならず恥づかしかりしが、つんぼうの雷に騷がす、座頭の蛇に驚かざるこぼれ幸ひなきにもあらず。よのつねの聞きわたる茶飲み語りも、始め聞けるこ



横井也有自畫讃

との耳に殘らねば、世に板返しといふ話ありて、又かの例の大阪陣かと、若き人々はつきじろひて小用にも立つが中にも、我は何がし僧正の時鳥ならねど、聞くたびに珍らしければ、げにと聞くかひある翁かなと、語る人は心ゆきても思ふべし。まして常々手

馴れ古せし文章・物語の双紙も、去年見しことは今年覺えず、春讀みし書は秋たど〳〵しく、又も繰り返し見る時は、たゞ新たなる文に向かふ心地して、飽かず幾度も面白ければ、僅に兩三帙の書籍ありて、心の樂み更に盡くることなし。昔炎天に腹を曝したる男は、人にも折々物を問はれて、取紛はしいひたるべしと、いかに喧しき心地かしけん。今はなか〳〵嬉しき物忘れかな。」とぞいひける。なほかの翁が家の集に、何の本歌をか取りけるならん。

忘れてはうち歎かるゝ夕べかなと物覺えよき人は詠み

しか

木履說

木履、木履笠は東坡が春の野がけの尻に敷かるゝ折もあるべきに、などや汝は夏の日の宰予が枕にも雇はれざる。日和續きて

本歌
「忘れてはうちなげかるゝ夕べかな我のみ知りてすぐる月日を」（新古今集、式子内親王）

東坡
蘇軾のこと。支那の宋代の文章家。

宰予
「宰予晝寢たり。」（論語）

男
郝隆。支那の晉代の人。

暇なる時は、緣の下に寢ころび、きり〴〵すの霜夜に伴なひ、又は座頭の杖にさゝれて、日待ちの壁にぶらつきては、傾くまでの月をも見るらん。適〻輕業の綱渡りに穿かれて、高みに人を見おろすこともあれど、常は沓脫に脆き、洗濯の日の腰掛となりて、それより上の交りは知らず。かく下樣のものながら、狩人の笛となりては、口に吹かるゝ例もありとや。その鹿の命を斷てるは罪深き身のはてなるべし。抑〻足高きものを木履・足駄と號し、丈低きを下駄といへるは、いづれ一體分身にして、こゝに尊卑の差別はあらねど、俳諧の上に二つの姿を論ずべくば、ぼくり〳〵と靜かなるは雪降りの朝にしてげた〳〵と忙はしきは村雨の夕べなるべし。

（鶉衣）

傾くまでの
「やすらはで寢なましものを小夜ふけて傾くまでの月を見しかな」（後拾遺集、赤染衞門）

狩人の笛
「女の穿ける足駄にて作れる笛には秋の鹿必ずよるとぞいひ傳へ侍る。」（徒然草）

石川雅望　江戸の人。國文學者。狂歌には宿屋飯盛と號した。文政十三年歿、年七十八。

九寸五分　切腹の時に用ひる懐刀。

菊川の宗行卿　承久の變に、菊川の邊にて斬られた源宗行をいふ。

木津川の重衡卿　壽永の爭亂後、木津川の畔で斬られた平重衡をいふ。

一一　灸

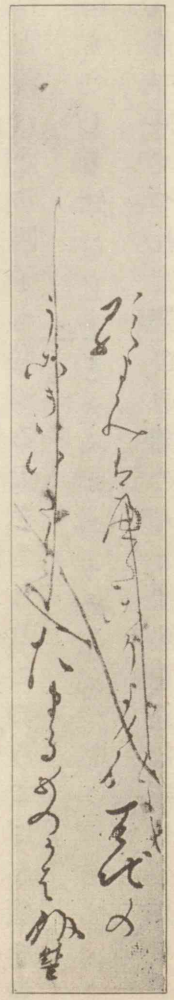
石川雅望

今日は天氣も長閑なればとて、妻なるもの、晝過ぐる頃、行燈に火とぼし、艾あぶりて、いざ〳〵といふにぞ、おのれ生得灸ぎらひにて、一寸遁れに明日・明後日と延ばしつれど、今日ばかりは遁るべきならず。籠城のつはものの糧盡きたる顏色にて、しぶ〳〵敷皮の上にゐざり出でて、潔く諸肌おしぬぎつ。九寸五分には足らじと思ふ灸箸を見やるにも、胸はがた〳〵と躍られぬ。菊川の宗行卿、木津川の重衡卿の御心も、かくこそと推しはからるゝほど、襟のあたりに物ぞ當る。すはと思ふより熱さこらへ難く、齒ぎしりしつゝ高くうめけば、妻なるもの、「あら仰々し。灸點の墨をつけたるにて候。」といひて笑ふ。「今日は如何なることにか、墨を塗るさへ熱し。」などいひて居れば、「今ぞ、かはきりにて候。」といひて、指して背のあたり抑へつ。なんでふ我もますらをなり、世に灸据ゑぬ人やはある、かゝる時おくれを見せんは、妻子にもあなづられて、かひなしとや笑はれんと思ひ念じて、せめて眼を閉ぢ息をつめて

かはきり　灸點で、据ゑはじめの最初の灸をいふ。

歌よみはへたこそよけれ天地のうごきいだしてたまるものかは　飯盛

太政入殿云々　平清盛が熱病で悶死したことを指す。



石川雅望筆

居るほど、總身脂の汗流れて魂消ゆる心地して、ものいふべうもあらず。「これは灸にてはあらじ。まさしく錐もてもむにやあらん。心なしの大きなるをえりて燒くにこそ。最初は小さきをえりてものせよ。よや、よや。」と叫ぶほど、今は三つ四つ一度に据うるにや、背中一面灸を負ひたるやうにて、「あら熱や。堪へ難し。」といふ聲、太

さしも知らじな
「かくどだにえ
やは伊吹のさし
も草さしも知ら
じな燃ゆるおも
ひを」（藤原實
方）

しめぢがはら
「なほたのめし
めぢが原のさし
も草われ世の中
にあらんかぎり
は」（讀人知
らず）

政入道殿の最期の苦患にも劣らず。かゝるに、うまごなる者の走り來て、「おぢいさまの灸据うる見ん。」とて、前の方に坐りて居り。今までは手拭を嚙み、眼口も一處によせて凌ぎつるを、この幼き者に恥ぢて、聲を忍ぶも術なしや。此奴かはきりの時によくぞ來らざりしと、いよゝ聲を呑みて居れば、胸に餘りて落つる涙は、灸饗にと設けたる團子も恥づる大きさなり。このうまごが顔を見るにも、さしも知らじなとさへうちうめかる。

背中果てつれば、帶ひき締めんとするを、艾なほ殘りありといふに、なにと返答いぶき山、しめぢがはらを据ゑんとなるべし覺悟を決めて、この度は二つ胴いざといふ身になりて、のけざまに打臥したるを、會釋もなく据ゑかゝる。これはさし揉むたぐひにはあらず、生きながら皮を剝ぎて腑わけをさるゝ思ひにて、手足

ばかりをもがくさま、さながら俎に載れるすつぽんの如し。いでや世に用なきほけびとのさまで延年の望みはなけれど、生きてあらんその間、看病人にあくびをされ、大壺に鼻をつまゝせんは苦しと思ふ心より、轉ばぬ先に杖をつきて、老の坂をば下らんとするなり。おのれ幼かりし頃、とかく蟲腹に惱みければ、過ぎゆき給ひし二親の、たゞ灸据ゑよ、据ゑよと、口につけて宣ひき。かく灸据うる度毎に、これこそ庭の教なれと思へば、惠み給へる慈愛のほどは、今も熱くぞ身にこたへたる。（狂文吾嬬那萬俚）

世わたりの道　宿屋飯盛

世わたりの道にふたつのおひわけやたからのやまに借金の

永井潛
醫學博士。廣島縣の人。東京帝國大學名譽教授。

一二　優生學と日本民族

永井潛

「世々の親の御蔭忘るな世々の親はおのが氏神おのが家の神」これは本居宣長の歌である。「祖先を思ふ者に幸ひあれ。」これは詩聖ゲーテの句である。人間は確に過去に住む。而して過去に住むことは、同時に又將來に活きる所以である。若し動物の生存が點であるなれば、人間の生活は線であり、面であり、立體であらねばならぬ。過去・現在・未來を一聯繫せる線・面・立體であらねばならぬ。祖先を思ふ心は、卽ち子孫を思ふ心であるのである。

人生は、自己といふ一個體たる小我の存在であると共に、更にそれよりも遙かに大切であるところの大我の存在である。小我の存在は五十年の露の命に過ぎないが、大我の存在は永遠であ

る。これあるがゆゑに、一家族が、一國民が、そして全人類が露の命を超越して、よく永遠に活き延びて行くのである大我と小我と、その輕重の何れにあるかは、問はずして明らかである。

しかも多くの人々は、餘りにも現實であるところの小我に執着する。そして未來であるところの大我を、殆ど全く閑却せんとする。小我は自身であり、現在である大我は子孫であり、未來である。一人その子孫を忘れる時、その家は滅び、國民その子孫を慮らなければ、その國は衰へる。古往今來、卓越せる家系が絕滅し、優秀なる民族が衰退したのは、主としてこれに因るのである。

一家族乃至一民族の將來の運命は、何によつて決定されるか。曰く、一面にはその數であり、一面にはその質である。否、その數と質との調和宜しきを得るか否かにある。これほど直截な、これほ

ど純一な優生學的理論は、外にはない。吾等は又、現にこの理法を動植物の上に適用して、著々として利用厚生の實を擧げ來つて居るのである。然も最も大切な人間に就いてこれを忘れて居た。

人間は、唯の動植物とは違つて居る。彼には旺盛な精神生活がある。彼は理想の世界に住んで居る。複雜な社會生活を營んで居る習慣がある。道德がある。法律がある。宗教がある。併しながら、是等凡ゆる精神的文化も、畢竟するに、人間といふ生物によつて造り出さるゝことを思ふ時、凡ゆる問題は、人間そのものの改善進歩に歸著する。然らば、人間の本質を改善するには、果してどうすればよいのであらうか。人間は、一個の自然物として、一般生物と等しく自然法に縛られて居るが、併し彼自ら文化を造り、文化の中に生活する點に於て、他の生物に見るべからざる特權を有つ

て居る。一般生物の形質と等しく、人間の形質もまた、內在せる先天的素質に、外的後天的環境が働きかけて決定されるものである。しかもその環境なるものは、一般生物にあつては、純然たる自然現象であるに反して、人類にあつては、自然と共に文化が働きかける。そして人文が向上進歩すればするほど、前者よりも寧ろ後者が重きをなすのである。自然に活き、本能に活くる動物の發育完成が、全く自然に終始して居るに反して、文化に活き、理性に活くる人間に在つては、問題はしかく簡單でない。彼は最も賴りない赤子として、この世の光を見る。そして彼の受くる教養と、彼自らの努力とによつて、歩一歩、段一段、進みに進んで遂に萬物の靈長として、生物の王座を占むるに至るのである。かくして人間に於ては、その進歩發達の過程が甚だ長いだけ、それだけ後天的

環境の影響に重きを置いて、先天的素質の大切なることを閑却するやうになる。そして孔子をして、「性は相近く、習ひ相遠し。」といはしめ、「氏よりも育ち。」といふ諺あらしむるに至つたのである。

ところが、輓近遺傳學の目ざましい進歩は、斷然かゝる考へを逆轉させて、「育ちよりも氏。」「教養よりも自然。」「環境よりも遺傳。」と叫ばしむるに至つた。獨り眼元や口元等の顏貌が、親子・兄弟の間に瓜二つといふ風に、よく肖て居て、後天的にそれを如何ともすることが出來ないばかりでなく、それと同じ程度に於て、精神上の肖よりも行はれるものであることが、有力な遺傳學者の研究によつて明らかにされた。そして又、遺傳的素質の點に於て、同一であるところの双生兒を資料として、たとへこれを全然異なれる環境の下に置くとも、身體は勿論のこと、精神の關係に於ても、兩者間の肖よりは非常に大なることの事實が闡明された今日に於ては、吾等はどうしても、先天的の遺傳が第一義であり、後天的環境が第二義であることを首肯しなければならなくなつた。

この意味に於て、人生を久遠に繫ぐべき大我の統制は、卽ち遺傳的素質の統制に外ならない。しかも從來人間によつて爲された凡ゆる努力、凡ゆる施設を考覈すれば、總べてが、現し身たる小我の上に限られて、最も大切な根本問題たる大我を逸して居たのである。この缺陷を充たすべく、優生學卽ち民族衞生學が崛起したのである。

念ふに、一八八三年に、フランシス・ゴールドンの手によつて、優生學が呱々の聲を擧げて以來、今日に至るまで、正に半世紀の間は、實に斯學に取つて忍苦の時代であつた。しかもこの寧馨兒は

フランシス・ゴールドン　英吉利の科學者。（一八二二―一九一一年）

實驗遺傳學の乳房に哺まれて、今や堂々たる青年となつた。そして大我の統制を閑却し來れる人類を覺醒すべく、一代の風雲兒として蹶起せんとして居るのである。

大羅馬帝國は何故に滅びたか。羅馬の文化が爛熟するや、人々はたゞ刹那的享樂に耽つて、大我の計を蔑ろにしたために、尊き羅馬人の繁殖は衰へ、これに代つて劣惡なる奴隷階級の子孫が增加したのであつた。そして又北氣南進の勢ひを以て、破竹の如くこの大羅馬帝國を脚下に蹂躙した北夷のゼルマン人も、南船北馬の戰鬪の旅次に於て、十分なる數の子孫を有ち得なかつたために、忽ち興り忽ち亡んで、果敢なき民族死の悲運を免れることが出來なかつた。歴史は繰り返す。古代文化民族を滅亡の谷底に擠した轍の跡を、現代文化民族も亦、自己中心主義・享樂主義の

旗を押立てて喘ぎつゝ辿つて居る。就中優秀な遺傳質を有てる者に於て、それが甚しく行はれ、劣惡な素質者の子孫が、代つてその空位を占有して居る。かくて恐ろしき逆淘汰が、今も昔も文化人の根幹を蝕んで居るのである。

飜つて我が日本及び日本民族に就いて見るに、東洋文化の精髄がその固有の靈と肉とに渾融して、眞美なる華を開き、純潔なる實を結び、一滴不純の血を混へざる、醇乎たる家族制度を構成し、これを大にしては、畏くも上皇室を中心とせる一大家族をなし、これを小にしては、家門のため子孫のために、喜んで力を捧げ、進んで國家といふ大我のために獻身的犧牲を辭せなかつたことが、我が大和民族をして、二千六百年の長日月を通じて、世界に類例なき光輝ある民族文化史の保持者たらしめた所以であつ

グルーバー　獨逸の衞生學者。（一七七四―一八五一年）

た。然も滔々たる時代の思潮は、今や澎湃として我が島帝國に押寄せ來り、曩に希臘を倒し、羅馬を覆し、而して又、現代諸文明國を呪ひつゝある恐ろしき毒杯は、將に我等の若き國民の唇に當てられんとして居る。眞に恐るべく憂ふべき寒心事である。

「文化は絶えず民族の花園の中から、最も美はしき花を摘取つて、それを以て自己を裝ひ、さうして終にそれを凋落せしめる。」獨逸の有名な民族衞生學者グルーバーのこの悲痛な叫びこそ、文化人の頂門に加へられたる絶大なる警告であらねばならぬ。基督曰く、「自己を愛する者は永遠の命を失ふ。」

文化民族の滅亡を救ふものは、民族衞生學を措いて他に求むることは出來ない。

太田水穂　名は貞一。歌人。長野縣の人。

一三　個性

太田水穂

個性といふことに就いて話して見よう。個性とは、各〻が持つてゐる特質をいふのだ。その特質のある幾多の個性を、一つの傳統や、或形式の下に束縛して、その發達を妨げるといふことは、非常に惡いことである。さういふ意味で、個性の自由を說くのは正當のことで、また必要のことであるが、さういふ意味を取違へて、何でも個性は自由である、勝手なことをすればよいといふ風に考へてゐるものがある。

さういふ人たちは、自分の個性に或檢束を加へて行くことが、自分の個性の修養であるといふことを知らないのだ。個性の自由といふことの意味を取違へてゐるから、かういふ錯誤（さくご）に陷る

のだ。個性が自由であるといふ意味は、めい〳〵の個性が、めいめいの方向を取り得ることの意味である。一個の個性に就いていへば、その個性が自身のはひるべき道を選ぶことである。個性の自由といふことを漠然と考へると、大變廣々とした勝手氣儘が出來るやうに思へるのであるが、さうではなく、個性は自由であるが故に、從つてめい〳〵はめい〳〵の道にはひることを、必然的に約束づけられるのだ。さうして、このめい〳〵の道は、その性質として、暫くめい〳〵に不自由な束縛となつて臨んで來るのだ。かやうに、個性の自由といふことは、その結果に於て、個性の不自由となるものだといふことを聞いたら、多くの我儘論者は驚くことであらう。

子供が出まかせに詩を作る、また出まかせに繪を描く。さういふものの中に、斷片的に、また時には一個の作物として、よいところのあるのも事實だらう。しかしそれは、まだ面白いとか、變つてゐるとかいふくらゐのもので、それに價値があるやうに思ふのは間違つてゐる。價値といふのは、目が明いてゐてした仕事でなければならない。實は人の一生涯の努力は、この眼を明けるためにするのだ。眼が明いて、眼が明きつくしたあげくに來る明るさが、ほんたうの明るさだ。

子供の眼は明るい。しかし子供の眼の明るさは、ほんたうの明るさではない。明るさの型だ。その型の內容を充たすためには、一生涯の努力や苦勞をするのである。さうして、その型が一ぱいに充たされた狀態で、明るく透通つて來るのだ。これを外界に就いていへば、物があるまゝの相で、みんな意味となつて來る。又自分

に就いていへば、自分の心があらゆる經驗を收めて、再び子供の心に歸つて來るのだ。

子供が自由畫や自由詩を作つて、その一つが、またその數個が、またその十數個が、面白いものであつたとしても、子供がいつまでもさういふものを續けて行けると思ふのは誤つてゐる。それは暫くのことで、やがて一つのきまつた手癖が出來てくる。この手癖の出來てくるところから、後の仕事がほんたうの仕事になるのだ。困難といふこと、道の遠いといふことの分るのは、それからのことで、一人の先達に就いて、その導きを受けるといふことも、それからのことだ。それは眼の明かない子供が、眼の明いた大人に就いて、眼の明け方の法を覺えるのだ。

こゝで、前にいつた個性の自由といふことを考へて見ると、その一人の先達に就いて眼を明かせて行くことは、個性の自由を害することかといふに、それは少しも害することにはならない。のみならず、それはさうなるのが當然であるのだ。先達の指導を受けるといふことは、その先達の指導によつて、自分の個性に檢束を加へて行くことだ。先達が檢束を加へるのではない。先達から來る力によつて、自身が自身を檢束するのだ。かういふ檢束が、道といふものの過程である。

この事はまた、かうもいへる。自分の行くべき道が見える頃になると、他人の道が尊くなつて見えて來るのがこゝである。それは、先達や師に就くといふことは、自分の力で開いて行かうとする道を、暫く他の力に委ねて、他の力にたよつて開いて行かうとするのである。自分の道の危險と不安と覺束なさとを知つて、先

達の力に據らうとするのだ。この心持は、一方から見ると、非常に個性が小さくて弱いことのやうに思へるのであるが、これは、ほんたうに修行をしようとするものの上に、必ず一度來ることである。つまり自分の小なるを知るわけだ。さうしてそれは、更に一層自分が大きくなることだ。

自分のことをいふのは變であるが、私などは、師といふ師を持つてゐないなるほど、形式的には持つてゐないが、なか〳〵どうして、師が無くて、たとひ僅であらうとも、こゝまで來られるものではない。少くとも私には、今まで五六人の古人が、順々に臨んで來てゐる。さうして、その度毎に一歩づつ道が廣まつて來てゐる。その古人は、凡て私の師だ。

師に就く以上、師のために暫く自分の個性が奪はれてしまふやうになるのは、止むを得ないことだ。それを自分の個性が劣つてゐることと思つたり、或は自分の個性が無いのだなどと思つたりするのは、考へ違ひである。また中には、師のために個性が蹂躙されるなどと思ふ人もあるが、皆間違つてゐる。師に奪はれるのは、師の道の中で自分が成長してゐるのだ。即ち師の道の中で、自分の道が開かれつゝあるのだ。

師の道は廣大である、縱横自在の道である。その師の道が、自分に臨む狀態にもいろ〳〵ある。或時は、千里の遠きにおつ放されるまた或時は、峻烈にきびしく自身に及びかゝつて來る。さういふやうに、あらゆる力の試みとなつて、自身の個性に臨むのであるが、それは凡て自身の心を喚び覺させることだ。個性の眼を覺して、その行くべき道の廣さと困難とを自覺させることだ。さう

いふことが、個性の自由を害することだといふならば、さういふ人は、もう救ふべからざる病氣にかゝつてゐるのである。

以上のことは、自然にまた師たるものの困難を語ることとなる。師となることは、容易なことではない。それは直ちに、多くの個性への傷害となる場合があるからである。或者は偏執な道を取つて、多くの個性の限りなき生長を抑へようとする。或者はまた放漫な自己を取つて、却つて道に入らうとする個性を昏惑に誘はうとする。それよりも甚しいのは、個性の自由といふことの意味も分らず、ちやうど子供が自由畫や自由詩を作るやうなのが個性の自由だと解して、師その人からが、自身を泥まぶれにして喜んでゐることである。さういふ先達の力によつて、百年泥をこねてゐたとて、道などの分らう筈がない。たゞ息が切れて、どつか

り坐つてしまふより外はない。俗に尻餅をつくといふのだ。さういふ例を今の世にも見るが、古人にも見る。

秀れた個性は、必ず自分の行くべき道を見つける。道には必ず門がある。その門をくゞるのだ。門をくゞるだけで終へてしまふ個性もある。門をくゞつて、或道まで來て終へてしまふ個性もある。その中の或個性だけが、一筋の道を遠く遙かに行くのだ。飢ゑと疲れと衰へとで引つ返したくなる。それでもまだ行く。物凄いほど寂しい。それでもまだ行く。さうして、やつとその果てに、明るい海が見えて來るのだ。海が見えるところまで行けば、まづ大丈夫である。（和歌俳諧の諸問題）

この道や行く人なしに秋の暮　（芭蕉）

島崎藤村
名は春樹。文學者。長野縣の人。

小諸
長野縣北佐久郡の町。

一四　小諸なる古城のほとり

島崎藤村

小諸なる古城のほとり、
雲白く遊子悲しむ。
緑なす蘩蔞は萌えず、
若草も藉くによしなし。
しろがねの衾の岡邊、
日に溶けて淡雪流る。

あたゝかき光はあれど、
野に滿つる香りも知らず。
淺くのみ春は霞みて、

佐久
長野縣南北佐久郡。

麥の色わづかに靑し。
旅人の群はいくつか、
畠中の道を急ぎぬ。

暮れゆけば淺間も見えず、
歌哀し佐久の草笛。
千曲川いさよふ波の、
岸近き宿にのぼりつ、
濁り酒濁れる飲みて、
草枕しばし慰む。

（藤村詩集）

蒲原

淺草寺

鈴木敏也
國文學者。愛知縣の人。廣島文理科大學教授。

安藤廣重
浮世繪師。江戸の人。安政五年歿、年六十二。

永井荷風
名は壮吉。文學者。東京の人。

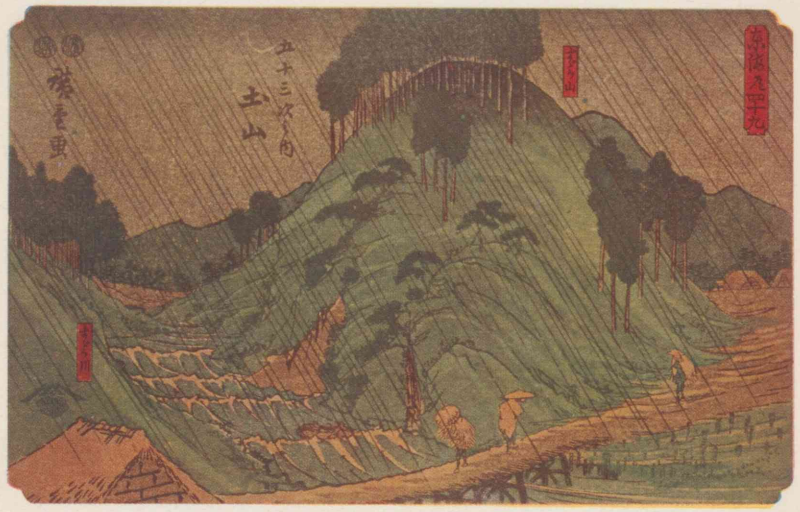
小島烏水

一五　安藤廣重

鈴木敏也

風景畫家としての廣重を見るには、その作品に現るゝ自然觀照の態度から眺めねばならぬ。彼が當代の浮世繪師と同じく、人事を主題とした作品をものしたことはいふまでもないが、同じく人事を寫すにしても、彼は殷賑よりも靜寥を、濃艶よりも清楚を、豪華の巷よりも靜寂の境を、より強い愛着と感興とを以て描いたやうに觀取せられる。かくの如き性情傾向の彼が、畫題を廣く大自然の懷に求めた時、和煦明麗な事象よりも、靜寂蕭條の風物に、より深い興味を持ち、より優れた畫趣を見出すのは當然の歸結であらう。彼は後世永井荷風氏をして「羈旅の詩人。」と呼ばしめ、小島烏水氏をして「多濕國の藝術家。」と嘆ぜしめたやうに、その

望月



土山

原須

洗馬

永井荷風
名は壯吉。文學者。東京の人。
小島烏水

く大自然の懷に求めた時、和煦明麗な事象よりも、靜寂蕭條の風物に、より深い興味を持ち、より優れた畫趣を見出すのは當然の歸結であらう。彼は後世永井荷風氏をして「羈旅の詩人」と呼ばしめ、小島烏水氏をして「多濕國の藝術家」と嘆ぜしめたやうに、その

名は久太。山岳研究家。東京の人。

坂 三重縣鈴鹿郡坂下村。

坂は照る〳〵 鈴鹿は曇る間の土山雨が降る。」（民謠）

鈴鹿 坂下村の西北方にある鈴鹿峠。

土山 滋賀縣甲賀郡の町。

須原 長野縣西筑摩郡大桑村の字。

山村水郭を寫すや、自然の核心に鋭くも喰入つて、雨を描き、雲を描き、夜を描いた。而も彼の傑作の多くは、この方面に殘された。

「坂は照る〳〵 鈴鹿は曇る。」と馬子唄に歌はれた、間の「土山」の雨の圖は、田村川の橋上を行き違ふ旅人を前景とし、流に臨んで杉の木立を頂にした丸い小山、その片蔭から淺黄色の鈴鹿山を覗かせた、比較的廣い景色を持つた夏の雨の繪に感興を惹かれる。

併し、雨の繪にあつて、彼の傑作は夕立に多い。今その一例として、木曾路の須原を擧げる。右によせた大杉の下に辻堂があつて、虚無僧と菅笠の旅人が、二人づつ雨宿りしてゐる菅笠の一人はしやがんだまゝ、杖を力草として俯きこんでゐるが、一人はつれづれのためか、矢立の筆で柱に何か認めてゐる。今しも、村の作男らしいのが、尻からげで籠をかつぎ、棒を肩にして駈けこまうと

名は久太。山岳研究家。東京の人。

坂

三重縣鈴鹿郡坂下村。

坂は照る〳〵
鈴鹿は曇る間の
土山雨が降る。」
（民謡）

山村水郭を寫すや、自然の核心に鋭くも喰入つて、雨を描き、雲を描き、夜を描いた。而も彼の傑作の多くは、この方面に殘された。

「坂は照る〳〵鈴鹿は曇る。」と馬子唄に歌はれた、間の「土山」の雨の圖は、田村川の橋上を行き違ふ旅人を前景とし、流に臨んで杉の木立を頂にした丸い小山、その片蔭から淺黄色の鈴鹿山を覗

蒲原

淺草寺

してゐる。やゝ遠景の街道を行く馬上の人、その後から小走りに従ふ男、共に莫蓙を頭から冠つてゐるのが、路傍の杉の樹もろとも、影繪のやうに黒く浮いて見える。向うは藪か森か、薄墨色に一抹され、空は暗々として、風強く雨激しき折の、攪亂された大氣と動搖する物象とが、鮮やかに寫されてゐる。しかし、前景の杉の葉の青、幹の根もとの薄黄、雨宿りする人の衣裝・持物の黄・藍・赤・白とりゞの色、又は手前の地面の綠色に明るい賦彩の漂ふのを咎めてはならぬ。白雨は過ぎ易い。前景に於ける雨は、既に絶頂を越して幾分の「明るさ」がさしそめ、横しぶきの雨脚は、次第に後景に移り行つて、そこに幽暗晦冥の世界が展開されつゝあるのである。微細なる感覺を働かして、始めて體得せらるゝ妙境といはねばならぬ。

淺草寺　東京市淺草區にある金龍山淺草寺。

雨を巧みに取扱つた廣重は、より以上に雪景に優れた冴えを見せた。西の内や柾目といふやうな地質の白い紙は、木版の壓しによつて、細い線の陰影を作り、生地そのものが、ふつくりと白く柔く浮き出して、自然に雪の情味を活かして見せる。

江戸百景の「淺草寺」は、雷門から仁王門を望んだ雪景色である。圖の上部によせて大提灯の下半を現し、左方を竪に劃して門柱を見せた。そして、その大提灯に半ば遮られた薄鼠の空からは、絶間なく降る雪に、木立も仲見世も仁王門も五重塔も、凡てが白衣の下に蔽ひ盡くされてゐる。たゞ樓門と塔との朱の色が、屋根の雪と相反映してゐるのみである。傘さしかけた參詣人や、蓑笠姿の小さい人影は、兩側の軒下か木下道をとぼ〳〵と辿るだけで、路の中央を行くのは一人もない。穩やかに降る淺草寺の畫の牡

丹雪。白と赤と鼠色との諧調、時と處との感觸が、心にくいばかりに捉へられてゐる。

しかし何といつても、寂寞の美を極點まで昂揚させたものは、「蒲原」の雪であらう。駿河路の冬は雪に暮れて、小驛の夜は沁入るやうに寒い。小山を背にし、木立に繞らされた宿場の家なみは、宵の口から大戸を黒く鎖して、緩い傾斜をなす街道は、たゞ雪の積るに任せてある。この靜寂を微かに破つて、傘をすぼめ、杖に足駄の雪を拂ひつゝ行く宿の人。それと背中合せに雪の夜を何處まで行くのか、蓑と合羽との二人。この三人の着色、代赭と藍とを取除けば、畫面は凡て白と鼠と黑との澁い沈んだ色調から成立つてゐる。驛路の雪の夜景畫、この上に何の賦彩を加へようぞ。自然の祕藏の扉を人知れず開いて、淋しき人のみ聽き得べき寂寥沈

蒲原　靜岡縣庵原郡の町。

痛の夜曲は、廣重の「蒲原」を通して僅に窺ふことが許される。

「靜かに霧の輝きをもて、草村や谿間を罩めつくし、終にはわが魂をもとろかし去る。」と、ワイマールの詩聖をして歌はしめた月の光が、わが廣重の心を抱擁しないわけはない。「月夜」の作品の多くが、彼に有るのはいふまでもなからう。

「望月」では、驛名にあやかつたのか、滿月の圖を作つてゐる。亭々として天を摩するばかりの松並木の下を、駄荷馬引く馬子が通る。路は爪先上りの坂道であるが、こゝが峠と見えて、行手はまただら〳〵坂らしい、黑ずんだ松の梢を低く見せてゐる。右手の谷間は夜霧におほはれて、竝木の影も幻のやうに浮く。月は丁度中央の老松の枝にかゝつて、微茫たる氣は全幅に溢れてゐる。大空を塗りつぶした藍と、松の幹の代赭と道路の灰とが、色彩の主調

ワイマールの詩聖　ゲーテをいふ。

望月　長野縣北佐久郡本牧村の字。

をなして、高原の秋をあやどる月夜の情趣は、十分に發揮されてゐる。

「洗馬」の月は、一際物淋しさが籠つてゐる。前景は斜に奈良井川を見せ、夕風にそよぐ葦間を分けつゝ、一艘の柴舟と筏とが、相續いて靜かに下つて行く。岸の楊柳は風に靡いて、遠く茅屋が點々する。十五夜であらう。まん圓い月が、森の上、柳の枝越しに上がつて、だんだら染の細雲は、その面に漲つてゐる。山村薄暮の冷氣が、ひし〳〵と身に迫るのを覺える。

から見て來ると、廣重は潤ひのある空氣と、さうした空氣を通して見た物象の光と色との交錯を、巧みに描いて、獨自の境地を占めた偉大な藝術家といふことができる。（近代國文學素描）

洗馬　長野縣東筑摩郡の村。奈良井川信濃川の支流。

吉江喬松　文學博士。長野縣の人。早稲田大學教授。

一六　伐木

吉江喬松

靜かな冬の朝の日の光は、こんもり茂つてゐる椿の藪影を、濃く地上に印して、その葉影のまはりの地上の霜は、きら〳〵輝きながら、じつ〳〵とかすかな音を立てて消えて行く。」

硝子窓越しに見る冬の空は、淡青に冴えて、迷ひ雲の一片すら見られない。郊外の村を繞らしてゐる杉の森の中に、細い煙突が一條見えて、薄白い煙が森の頂に靡きかゝつてゐる。十二月の初旬からかけて一月中旬まで、冬はその最も靜寂な姿を示してゐる時だ。渡鳥の鳴き聲一つ、落木の小枝を搖がす風さへ聞えて來ない。夏の夜に耳にする若やいだ人々の話し聲は、何處へ消えたのやら、總べてが冷たい空氣の中に、ぢつと凍てつきでもしたや

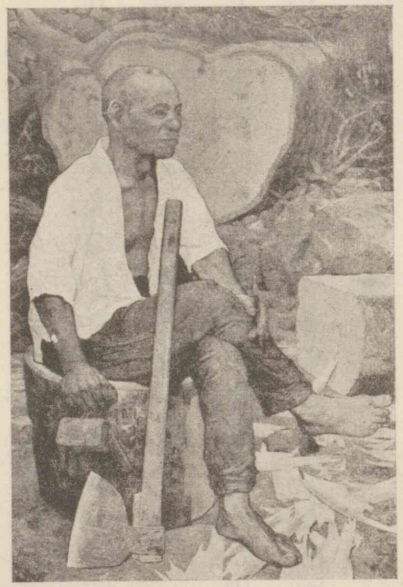
うに、靜肅のきはみを見せてゐる。

「と、何處からか、どさんと物を投げ出したやうな、頼りない物音が響いて來る。その物音は、强く空氣を震ひ動かすのでもない。いかにも力なげに、疲れた身體をクッションの上に投げるやうな、投げたらばもう立ち上がる勇氣もなさゝうなものの響だ。

ぢつと耳を澄ましてゐると、今度は短いが、稍手ごたへのある、澄んだ響が傳はつて來る。がつさ〳〵と木の枝の搖れるのが聞える。地續きの櫟林を伐つてゐるのだ。

少し間を置いて、またどさつと倒れる音がする。がつさ〳〵と枯葉の附いたまゝの枝を拂ふ音がする。二三人の人聲さへ聞えて來る。物寂しい悲しい思ひが、微かに胸をめぐる。郊外の林を伐り倒し伐り倒しして、人は家を建てる。それも若葉のみづ〳〵し

い初夏の森には、手をつけ得ずして、枯木のやうにぢつと動かず立つてゐる冬の森へ來て、人々はこは〴〵ながら、その冷たい幹へ斧を打込んでゐるのだ。



伐木（小杉未醒筆）

五抱へにも餘る槻の大樹を伐り倒して、その樹幹が深く地中に喰込んで、高く土煙を立てた恐ろしさと寂しさは、今でも私の胸に深く沁込んでゐる。五月頃の槻の若葉の重なり重なつた眞青な團塊は、口惜しさに身を慄はせ、一葉々々の細い神經が、悉くびり〳〵震へてゐた。根元の大きな白い伐り口は、幾百年籠つてゐた精氣を吐

き出して、人間をその中に包んでもしまひさうに、伐り倒した杣達でさへ、恐ろしさに打たれてか、暫くその周圍を廻つてゐるばかりで、伐り口へ手をつける勇氣を持つ者さへなかつた。

若樹を伐るのは罪だと、故老はいひ傳へてゐる。郊外の森を伐り拂ふには、決つたやうに冬枯の時期にしてゐる。杉や櫟や欅の樹が、皮を剝がれたり、枝を伐り拂はれたり、幹を伐り刻まれたりして、路傍に投げ出されてある。その樹肌に冷たく霜が置き、慘らしく日が照りつけ、ざら〳〵した砂塵が、痛ましく肌目に沁込んでゐる。

山國の寒い空氣に高鳴りを傳へて、谿間に伐り倒される松の樹の音には、鋭く地殼を裂き破つて、地中まで深く突き通して行くやうな、凄い響が籠つてゐる。伐り倒した者の立つてゐる地面

が、同じ凄い唸り音を立てて、一木の倒れた後に、長く長くその響を藏して傳へてゐるやうだ。夜陰になつてから、何とも知れず、地を破り山を突裂いて高く鳴り渡るものの響は、この伐木の恨めしい物音が、地中から高く反射するのかも知れない。かあんと響いて高く斧を彈き返す凍つた樹幹は、暫し刃金の鋭さをも寄せつけずにゐるが、幾度も打込む斧の刃は、遂にその樹の胴へ深く喰入つて、きしむやうにして容易くは拔き取れない。刃金と樹幹との烈しい爭鬪は、冬の寒國でよく見掛ける現象である。

抵抗するだけの力も無く、不意を襲はれて伐り倒される郊外の櫟林の哀れさ、高鳴りを立てるだけの力さへない若芽の角ぐむを待つて、落つべき運命を持つてゐる櫟の葉は、たゞがつさがつさと、鋸の根元に喰入つて行く毎に、斧の烈しく打込まれる度

に、微かな身慄ひをしてゐるに過ぎない。枯草の上へ投げ出された幹の、病者が床の上へ崩れて倒れるやうなはかない響、その中に、武藏野の横なぐりの秩父おろしに抵抗した、あの強い力が籠つてゐたらうか。」

「伐木の賴りない、力ない響は、終日冬の郊外の林に響いてゐる。

（現代隨筆全集）

石原正明　國學者。江戸の人。文政四年歿、年六十二。

曉いとよきものなり。かう世ばなれたる里ながら、晝のほどは、とかくまぎるゝこともあり、宵のほどはひと日のつかれとり集めてねぶたきを、丑みつなどいふほどより起きいでて、ふみに向かひたる、四方にはいさゝかの物音もなくて、いと心すむわざなり。冬はひまもる風のいと寒きに、埋火かきおこすほど、遠山寺の鐘の音たゞこゝもとに聞えなさるゝも、いとゞ浮世遠き心地ぞする。（石原正明）

福地櫻痴　名は源一郎。劇作家。東京の人。明治三十九年歿、年六十六。

竹千代　德川秀忠の長子。後に三代將軍家光となる。

國千代　竹千代の弟。後、忠長と名のり、駿河國に封ぜられた。

酒井雅樂頭　名は忠世。德川氏の重臣。

土井大炊頭　名は利勝。德川氏の重臣。

青山伯耆守　名は忠俊。德川氏の重臣。

春日局　竹千代の乳母。

高圓　德川秀忠夫人附

一七　春日局

福地櫻痴

第六幕　大御所敎訓の場

人物　德川家康　秀忠御臺所　竹千代　國千代　酒井雅樂頭　土井大炊頭　青山伯耆守　御側衆　數人　春日局　高圓　梅の戸　女中數人

時　慶長十八年四月中旬

舞臺には上段を設け、其處に家康蒲團の上に坐す。御臺所下げ髮にて側に坐す。家康の側には脇息、後ろには刀掛などあり。

下段には、酒井雅樂頭・土井大炊頭・青山伯耆守、その外小姓・御側衆・老女・高圓・春日局、並びに女中居並び、すべて話の體。

酒　井（手を附いて）「俄の御下向につき、注進承りますると、すぐさま

の老女。
梅の戸　竹千代附の女中。

罷り出で、せめて品川までも御出迎へと心得ましたるところ、はや御着とのことにて、その間に合はず、恐れ入つて御座ります。」

家康「いや〳〵その心配は無用ぢや。實は兩人の和子たちが、大層成長して、めつきりと大きく成つたと聞き、孫の顏が見たく、老人の癖か、見たいと思ひ出すと、さあ早く見たくなつて我慢が出來ず、そこで獵場からすぐに乘切つて來たのぢや。たゞ今も將軍家に承れば、俄に參つたので、何事が起つたのかと案じられたさうな。」

酒「實は、私どもまでも御案じ申し上げまして御座りました。天氣は麗かなりとは申しながら、もはや薄暑の折柄。」

土井「御高年に渡らせて、御乘切りの御道中、何の御障りもあらせられず、」

青山「御機嫌よき體を拜し奉りまして、」

皆々「一同恐悅申し上げます。」

家「いづれも無事でめでたいな。……時に、御臺所、冬年はゆる〳〵とお目にかゝり、その節は御兩處の御世話に與りました。竹殿も、國も、殊の外に成人で、祝着で御座る。竹殿には兩三年前より、この三人を附け置きました。春日も傍を離れず附いて居るから安心であるが、國にはその後附人をお極めなされたかな。」

御臺所「まだ、さして誰とさし極めましては申し附けませぬが、何れお差圖を願ひます心得に御座ります。」

家「さうで御座るか。早く附人を取極められてよろしからう。竹殿の器量は幼少の折から能く見拔いて、附人も心を用ひて、選み置いたが、國は一體すぐれて發明の生れ附き、御兩處にも別して祕

藏と承る。さもありさうなことぢやそれに附けても發明だけに、なほさら躾が肝心ぢや。」

御「恐れ入りまして御座ります。國も發明だけに、どうも蟲氣が強う御座りまして、」

家「さあ、その蟲氣といふことが甚だよろしくないてな。幼少のものが、得て氣に入らぬことがあると、側にあり合ふ器物などを投げはふることがあるのを、蟲氣ぢやといつて捨て置くは、却つてその身の毒を增すと申すもの。先づ、蟲氣ならば、灸治をするか、藥を飲ませて、募らぬやうにせねばならぬ。子供の折から、氣に入らぬに任せて癇癪を起す癖が附くと、その通りにしてもよいことと心得、成長の後には、遂に、氣に入らぬことを申す家來があると、手討に致すなど、氣隨に相成つて、親に疎まれ、兄弟に疎まれ、はては家來に恨まれて、一家一國の亂れとなることがあるでなう。雅樂。」

酒「上意の通りに御座ります。竹千代樣は申すに及ばず、國千代樣とても、なか〳〵御我儘と申すことはなく、御行儀作法最もよく渡らせられます。」

家「それは何より重疊ぢや。行儀作法は幼少より仕附ければ、成人の後俄には仕附けられぬもの、畢竟親の教を用ひずして、我儘に振舞ひ、親のない後には國を亡すやうになるのも、元はといへば行儀作法がわるいからのこと。」

御「段々の御教訓有り難う存じ上げます。兩人とも、その心得にて育てまするで御座りませう。」

家「さうなうては相成りませぬ。先づ第一、大勢の子供を育てるに

はな、惣領は跡取ゆゑに格別として、次男以下は家來同然に心得よと、常々より申し聞け、當人によくその事を得心させて置かるべし。惣領より次男の威勢が強いのは、家の亂れの元で御座る。」

と、御臺所の顔を見て、春日を御覽なさる。一座の面々さてはといふ思ひ入れあり。

家「いやもう、年寄の癖で、いつも〳〵面白くない話ばかりで、退屈であらうが、これも亦一興ぢやと思つて、何れも相手せい。……時に大炊、その方は、我等がつね〴〵堪忍は第一の身の守りと申すのをよく聞いて居るであらうが、さて、どうその堪忍をするか知つて居るか。」

土「愚昧の大炊、なか〳〵心得ませぬが、こらへ難きところをこらへ、忍びにくいところを忍ぶのが、卽ち堪忍かと存じます。」

家「その通りぢやぞ。そこで藝術にも、學問にも、堪忍が無くては相成らぬ。凡そ天・地・人・仁・義・禮・智に、皆それ〴〵の堪忍がある。我等題を出して聞くほどに、御臺所を始め、その方どもも皆一々答へて見よ。先づ天道に叶ひ身の我儘を働かぬ堪忍、地の理によつて先祖より傳へたる家を失はぬ堪忍、人和を得るとも氣隨を出さぬ堪忍、これが卽ち天・地・人三才の堪忍である。……さあ御臺所、抑禮の堪忍とは。」

御「人のことを先にして、わが身のことを後にし、起きるより寢るまで、行儀正しくするが、禮の堪忍かと存じます。」

家「天晴々々。雅樂、仁の堪忍は。」

酒「召仕の者並びに百姓に至るまで、仕置きを正しく、慈悲を專一と致すが、仁の堪忍。」

家「大炊、智の堪忍は。」

土「我が智慧に慢じて、人をないがしろに致さず。」

家「伯耆、義の堪忍は。」

青「君に仕へて、身命を顧みず。一旦言ひ出したる言葉を變ぜず。」

家「いかにもその通り。……そこで、春日、目の堪忍は。」

春日局「かりそめにも、表裏のことなく、物好みせず、榮耀榮華に目を動かさぬが、目の堪忍。」

家「鼻の堪忍は高圓。」

高圓「よい香をも好みませず、又穢はしい臭も恐れませぬが、鼻の堪忍。」

家「はゝゝあ。（笑ひながら）これは大出來だ。」

皆のものくすゝ。笑ふ。高圓少々赤面の體。

家「まづ、堪忍は何れも申す如くであるが、口では立派に申せども、さてその堪忍がなかゝ出來ぬものぢやてなう。堪忍が十の七八で破れたがつて、どうも十全ならぬのだが、十全の人はめつたに無い。」

御「父上樣こそ、その堪忍を十全遊ばしていらせらるゝと存じ上げます。」

家「いやゝ、我等などもやはり十全とは參らぬて。さやう、日本にて堪忍を十全したる大將は、楠正成一人。そも後醍醐天皇の御召しに應じ、御味方し奉り、僅の小勢にて赤坂の小城に義兵の旗をあげ、六波羅の討手を引受け一戰に及びしより、湊川の最期に至るまで、千辛萬苦をしのぎ、忠義一途にこり固まり、いかなる難儀に出遇うても、いつかな心を動かさず、我なき跡にて、子孫までが

南朝の御ために一門の身命を抛ちたるは、天晴なる武士の鏡、家康つねづね正成が堪忍の十全なるを學ばんと心掛けて、まづ今日までは參つたが、なかなか及ばぬところがある。」

酒「有り難い御話を伺ひまして、大きに思ひ當ることも御座ります。」

一同「有り難う存じ上げます。」

家「いやもう面白うない話で、御臺所も御退屈で御座つたらう。……時に春日、その方はたしか、男の子が三人あるなう。惣領はもはや竹千代殿の御小姓に差し出したか。」

春「恐れながら、先年伊賀よりも申し聞け、その後、雅樂よりも兩三度申し聞けましたれども、私より願ひ上げまするも、あまり御恩に甘えますやうに御座りますれば、惣領千熊こと、未だ御奉公に

伊賀　板倉伊賀守勝重をいふ。德川氏の臣。

差し出さずに控へ居ります。」

家「なぜ、今以て差し出さぬ。さやうなことは、決して遠慮に及ばぬものぢやぞ。その方が竹千代殿を大切にお守り申すによつて、その御恩に忰を御小姓に召抱へらるゝは、これ當然のこと、過分と申すべきほどにあらず。その上親子久しく離れて居るのは、つい人情の薄くなる元、追つては、その方が夫・忰とも皆呼びよせるほどに致し遣はすぞ。先づ惣領を早く差し出せ。雅樂その方ども宜きに取計らへ。」

酒「畏りました。早速春日が惣領千熊こと、若君樣御小姓に召抱へらるゝやう取計らひ申すで御座りませう。」

春「御恩のほど身に餘り、有り難き仕合せ。御禮申し上げます。」

家「高圓、そちは子を持つたことはないなう。」

高「どう致しまして、私ことは、十二歳のころ、濱松にて先御臺樣の御小姓に上がりましてから、當年五十三歳に相成りますまで、一月もお奥を出ましたことは御座りませぬ。」

家「なぜ、緣附き致さなかつたか。」

高「先御臺樣よりも、度々その仰せも御座りますし、又兩親存命の頃は、しげ〳〵緣附きのことを申し進めましたれど、一旦御奉公相勤めましたる上は、一生御側にかしづき奉り、及ばずながら御忠節を盡くしたいと存じまして、夫をも持たず、お側仕へ仕つて御座ります。」

家「さうであつたか。それも當人の心次第ではあるが、なあ、御臺所、女と申すものは、夫を持ち、子を生むはずのものぢや。それが、年頃になつても、緣附き致さざる時は、天理にそむき、人情を辨へぬやうになる。大奥に召使はるゝ女どもも、若い者は年頃にならば緣附かせ、又年寄には夫婦・親子の情を知つたるものを召使はるゝやうになされたがよろしからう。」

高圓少しぎつくりする思ひ入れ。家康は見ぬふりにて、懷中より書附を取り出して、御臺所に渡され、

家「これは、子供を育つる心得をば、老人の夜なべ仕事に長々と認め置きたるほどに、とくとお讀みなされたがよい。隨分御ためになることも御座らう。尤も國が成人の上は、その書附國に遣はされい。」

御「有り難う存じます。よく拜見致しますで御座りませう。」

と、戴いて懷中に入れる。この時、家康また懷中より一通の書附を出されて、

家「これは、只今も申した、堪忍のことをば我等自らの戒め、またその方どもの教へにもと、相認めたれば、一同よく心得おけ。」

とて、書附を春日に渡され、

家「春日、それを讀んで見よ。」

春日戴いて、讀み始める。御臺所はじめ、一同手をついて聞く。

「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望み起らば我より困窮のものを思ふべし。堪忍は無事長久の基、物好きは敵と思へ。勝つ事ばかりを知つて負くる事を知らざればその身を害するに至る。唯己を責めて人を責むることなかれ。何事も及ばざること過ぎたるよりまさるぞ。」

一同「御教訓有り難く承りまして御座ります。」

春日讀み終りて、書附をいかゞしようかと思ふ體を御覽なされて、

家「春日、その書附はその方に預け置く。竹千代殿にもよくこれを讀み聞かせ、また奥・表の者にも、望みとあらば見せ遣はせよ。竹千代殿十五歳にならせたらば、余が形見なりとて差し上げよ。」

春「畏りまして御座ります。」

と、戴いて、扇にはさみ、懷中する。家康は、ふと心づきたる體にて、御臺所に向かひ、

家「竹殿も、國もまだ參られぬが、早くこれへ呼び申されい。」

御臺所の差圖にて、高圓・春日兩人たつて女中へ申し附け、元の座に歸る。

引違へて竹千代・國千代揃ひの衣裳、黑の紋附振袖・袴・一刀にて、竹千代には梅の戸、國千代にも同じ拵への小姓ついて出

で、小姓は下手に控へ、竹千代・國千代はずつと上段近く進みて、下段に平伏する。家康喜びの體にて、

家「いや〳〵、大層成長して、行儀作法もよく、おとなしくなりやつたなう。」

と、しみ〴〵兩人を御覽なされしが、

家「竹千代殿、お菓子を進ぜよう、これへお出でなされ。」

竹千代一禮して上段に上がる。國千代續いて上がらうとするを、家康御覽あつて、はたと睨み、

家「しいつ、これ、國、いかゞ致した。勿體ない、こゝはその方が上がる處ではないぞ。それにゐよ、それにゐよ。」

國千代はつと恐れ入りて、元の下段の處に坐り、子供ながら無念の體。家康は前にあるお菓子の高坏より、箸にて菓子を數々取りて、紙にのせ、兩手に持ちて、

家「竹千代殿、お菓子を進ずる。」

と、差し出す。竹千代兩手にて戴きて、拜領する。家康は國千代の方を見給ひ、

家「國、その方も相伴致したいか。」

とて、右の手にて殘りのお菓子を二つ三つ摘みて、下段の方へはふり出し、

家「國、さあそれをたべい。」

國千代お菓子を拾ひ、兩手にて持ち戴き、無念の體。春日の局・雅樂頭、その外も安心の體。御臺所・高圓は意外の體。家康はさもあらうといふ體にて、幕。（春日局賢女鑑）

高須芳次郎　文學者。大阪の人。

靜寛院和宮を申す。

ペルリ　米國の海軍將校。西暦一八五二年に來朝（一七九四―一八五八年）。

浦賀　神奈川縣三浦郡の町。

プーチャチン　露西亞の海軍軍人。西暦一八五二年に來朝。

一八　靜寛院

高須芳次郎

江戸幕府の歴史を見て、いつも深く感動せしめられるのは、獻身の一生を送られた皇女和宮の御事蹟である。和宮の少女とならせられた時代は、我が國では多難を極めた秋であつた。米國水師提督ペルリが浦賀に來る、續いて露西亞の使節プーチャチンが長崎に來るといふ有樣で、彼等が世界の大勢を說いて通商互市を求めたに對して、我が國では開港を主張するものと、昔通り鎖國を唱へるものとがあつて、その間に烈しい爭ひが起つた。時の總理大臣ともいふべき井伊直弼は開港說に決して、斷然米國との通商條約に調印し、一方、攘夷派を手强く抑へつけて、手當り次第に獄舍に投込んだので、彼は櫻田の雪と共に消えて世を去つた。

家茂　十四代の將軍。慶應二年薨、年二十一。

有栖川宮　熾仁親王。明治二十八年薨、御年六十一。

世はかうした有樣であつたが、當時の朝廷が外交に就いて抱いて居られた意見と、幕府の考へとは一致しなかつた。幕府では、直弼がその事を心配して、朝廷と幕府との間を圓滿にするために、內々和宮を將軍家茂夫人に迎へ奉りたいと、朝廷に歎願してゐたのであつたが、直弼の歿後になつて、始めてその事が實現せられるやうになつた。

和宮は仁孝天皇の第八皇女で、弘化三年の御出生。六歲の時、有栖川宮と御婚約あらせられたのであつた。ところが、內外多事の時代となつて、朝廷と幕府との間柄がとかく圓滿を缺くやうになつたので、朝廷の大臣等の中にも、それらの事に心を痛めて、朝幕一和の有樣に立ち返るやうにと願ふ者があつた。それは幕府

の當局でも同様であつた。かうした事から、和宮御降嫁の事は次第に話が進んで、とう〳〵有栖川宮との御婚約を、雙方の御諒解の下に取消すことにせられて、改めて、和宮が十六歳の時、十四代將軍家茂の許に御降嫁あらせられたのである。

をしまじな君と民とのためならば身は武藏野の露と消ゆとも

宮が詠みいでられたこの一首の歌を誦すると、胸の中で、雄々しく自分の運命に就いて達觀せられると共に、どんなに苦しくとも、悲しくとも、朝廷のため、天下のために良いならば、自分ひとり、ぢつとそれを忍ばうと決心せられた御樣子がよくわかる。

その後、宮は未だ慣れ給はぬ長途の旅に上られて、事なく江戸に着かれた。そして家茂夫人となられた。宮と夫君家茂との間は、

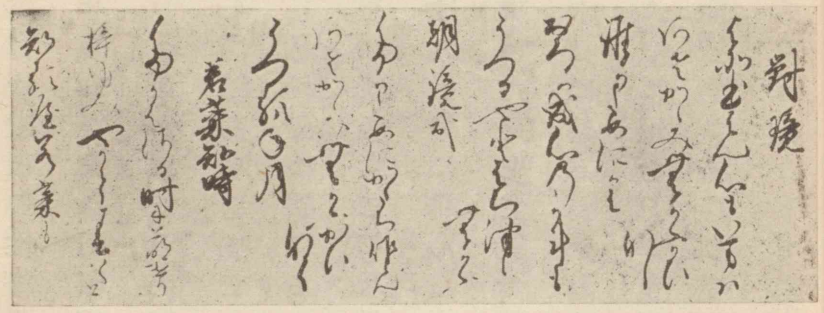
前將軍夫人
徳川家定の室。名は敬子。明治十六年歿、年四十七。

對鏡

よそほはん心もいまはあさかゞみむかふかひなし誰がためにかは
おろか成心のかげにもうつるやとはぢつゝむかふ朝鏡哉
たがためにかたち作らんあさかゞみむかふかひなくうつる年月

若菜知時

たがはざる時に萌けり梓弓やがて春くと知るや若菜も



和宮御筆蹟

春風の吹くやうに美しく暖かであつた。だが、前將軍夫人天璋院が、とかく宮に對して冷たい態度を以て臨んだことは、未だ世の中の荒い風に當られない宮に取つては、かなりな御苦痛であつたらうと思はれる。

家茂は心から宮を愛した。宮にはそれが何よりの心強さであつた。だが、家茂も亦内外多事の時代であつたから、思ふやうに家庭の平和を樂しむ餘裕に乏しかつた。困難な問題が引續いて起つて、家茂の心を惱ましがちであつた。

宮は家茂の性格やその周圍を見て、心から家茂に盡くさうとせられた。文久三年家茂が入洛する時には、和宮もまた共に西の京へ赴かれた。そして家茂が大阪城に入つた時には、宮も蔭ながら内助の功を立てられた。

だが、宮に取つても、家茂に取つても、この上ない不幸が涌いた。それは慶應二年八月、家茂が、その志した長州征伐が一段落も告げない中に病んだことである。新秋の風は冷たく家茂の病床に吹いた。そして彼の病は一日ごとに重くなつて、とう〳〵八月二十日に薨じた。この時の宮の御悲みはどんなに深かつたであらう。空に澄む月の色も、叢に鳴く蟲の聲も、皆哀愁を誘ひ出すよすがとなつたであらう。

暖い愛の下に、互に平和を樂しまれた宮は、家茂を失つてから、

急に寂しさが身に沁みるやうに思はれた。世の中のあらゆる悲痛が宮の上に集つたやうに、盡きぬ涙に袖を濡された。その時、宮は二十一歳であつた。宮は一生寡婦として暮さうと決心せられたそしてその美しい黒髪を惜しげもなく切つて捨てられた。あ、かうして後に生き殘つてゐるよりは、いつそ夫と一緒にあの世へ行つた方が、どのくらゐ幸福かも知れない、生の悲痛、生の寂寞、それはもう堪へられないと、宮は打惱ませられた。

みつせ川世のしがらみのなかりせば君もろともに渡らなましものを

世の中の憂きてふ憂きを身一つにとり集めたる心地こそすれ

これ等の歌を讀むと、宮の御痛ましい有樣が眼に見えるやうで

ある。この時分から、宮は靜寛院と稱せられた。

その後、時勢が幾度も急變して、幕府の亡びる日が愈〻近づいた時、宮は飽くまでも、幕府と朝廷との關係を和げることに就いて、御心を盡くすことを惜しまれなかつた。家茂薨去の後は、幕府と宮との關係は以前のやうではなかつた。京都では、宮が幕府を離れて歸られることを切に望んでゐたし、朝廷でも、宮の御身の上を非常に氣づかはれたのである。けれども、宮は一旦家茂將軍夫人となられた以上、貞婦としての道を全うして行くために、やはり最初御降嫁あらせられた時のやうに、朝・幕の一和を計るのが自分の務だとせられた。そして十五代將軍慶喜のためには、特に力を添へられて、寛大の處置を執られるやう、親しく朝廷に歎願せられた。

龜之助　德川家達。慶頼の第三子。公爵。

宮の心を籠められた歎願は、確に朝廷を動かした。慶喜はそれを深く感謝した。そのうち王政維新の時代になつて、宮は極めて質素な生活をして、わびしい日を送られた。そして京都から度々御迎への使者が來たけれども、德川家の前途をはつきり見屆けるまでは、歸らうとせられなかつた。宮はこの御決心で、江戸に留つてゐられたが、龜之助が慶喜の後を繼いで、新しく駿河に封ぜられたことを聞いて、ほつと安堵せられた。

その後明治二年に入洛せられ、數年間御滯在あらせられた後、東京に歸られ、麻布に住んでいらせられたが、明治十年病んで、三十二歳で薨ぜられたのである。

宮の御一生は、美しい清い愛と、犧牲獻身の誠とを現された歴史である。家茂の亡くなつた後、深い悲みにもうち勝つて、よく德

川家の前途を見屆けられた點は、立派な男子でさへも及ばない。誠に雄々しい御心を示されたものといはなければならない。私は、宮の御一生が、――殊に後半生が、――寂しい色で包まれてゐることに限りない同情を捧げたいと思ふが、またさうした苦しい、寂しい運命にお遭ひになつた宮が、平凡に幸福な生を送るところの女性よりも、遙かに尊い、充實した生を送られたことに對して、深い敬仰の情を捧げたく思ふのである。

われもまた同じみ國に生まれ來てやまと心のあらざらめやは　（望東尼）

山のはにかゝる浮雲ふき分けてくもりなき世の月ぞ待たる　（蓮壽尼）

望東尼　名は野村元子。維新の烈女。慶應三年歿、年六十二。

蓮壽尼　名は有村れんこ。維新の烈女。明治二十八年歿、年七十四。

一九　橋本少將へ

靜寛院

叡慮のほども伺ひ申さず願ひ出で候も、恐れ入り候へども、心痛に堪へかね、願ひ試みまゐらせ候。去る三日召しにより慶喜上洛のところ、不慮の戰爭に相成り、朝敵の汚名を蒙り候間、一先づ歸府のところ、德川征伐のため官軍差向けられ候やに承り、當家の浮沈この時と心痛致しまゐらせ候。慶喜より承り候趣は、委細藤より申し入れ候通りに候。何分雙方を承り申さず候うては、理非分りかね候。

この度の一件は、ともかくも慶喜これまで重ねゞ不行屆の事ゆゑ、慶喜一身は如何やうにも仰せ附けられ、何卒家名立ち行き候やう、幾重にも願ひたく候。後世に當家朝敵の汚名を殘し候

橋本少將　名は實梁。

去る三日　明治元年一月三日。

歸府　明治元年一月十二日。

藤　侍女土御門藤。

事、私方に取り候うては、實に殘念に存じまゐらせ候。何卒私への御憐愍と思し召され、汚名を雪ぎ、家名相立ち候やう、私身に代へ願ひ上げまゐらせ候。是非官軍差向けられ、御取りつぶしに相成り候はば、私事も當家滅亡を見つゝ、永らへ居り候も殘念に候まゝ、きつと覺悟を致し候所存に候。私一命は惜しみ申さず候へども、朝敵と共に身命を捨て候事は、朝廷へ恐れ入り候事と、誠に心痛致し居り候。心中御憐察あらせられ、願ひの通り、家名のところ御憐愍あらせられ候はば、私は申すまでもなく、一門家僕の者どもも、深く朝恩を仰ぎ候事と存じまゐらせ候。何卒々々、このところよく〳〵御申し入れ、御願ひまゐらせ候。

尚同役衆へも宜しく御申し傳へ、御取計らひの事、幾重にも御願ひ申し入れまゐらせ候。以上。

勝海舟　名は安芳。伯爵。江戸の人。舊幕臣。明治三十二年歿、年七十七。

西郷　名は隆盛。維新の功臣。明治十年歿、年五十一。

大久保　名は利通。維新の功臣。明治十一年歿、年四十八。

二〇　西郷と大久保

勝海舟

勝海舟

この東京が何事もなく、百萬の市民が殺されもせずに濟んだのは、實に西郷の力で、その後を引受けて、この通り繁昌する基を開いたのは、實に大久保の功だ。それ故に、この二人のことを、我々は決して忘れてはならない。

あの時、わしは、この罪もない百萬の生靈を如何にしようかといふことに、一番苦心したのだが、併し、最早かうなつては仕方がない。たゞ至誠を以て利害を官軍に說くばかりだ。官軍が若しそれを聽いてくれなければ、それは官軍が惡いので、わしの方には、少しも曲つたところがないのだから、その場合に

は、花々しく最後の一戰をやるばかりだと、かう決心した。

それで、山岡鐵太郎が靜岡へ行つて西郷に會ふといふから、わしは一通の手紙を託けて西郷へ送つた。山岡といふ男は、名前ばかりは豫て聞いて居たが、會つたのはこの時が始めてだつたそれも、大久保一翁などが、山岡はわしを殺す考へだから用心せよといつて、一寸も會はせなかつたからだが、この時の面會は、その後十數年間莫逆の交りを結ぶ本になつた。

山岡鐵太郎　舊幕臣。明治二十一年歿、年五十三。

大久保一翁　舊幕臣。明治二十一年歿、年七十二。

さて山岡に託けた手紙で、まづわしの精神を西郷へ通じて置いて、それから彼が品川に來るのを待つて、更に手紙をやつて、今日の場合、決して兄弟牆に鬩ぐべき時でないことを論じたところが、向うから會ひたいといつて來た。そこで、いよ〳〵官軍と談判を開くことになつたが、最初に西郷と會合したのは、丁度三月の十三日で、この日は何も外の事はいはずに、たゞ和宮の事について一言いつたばかりだつた。全體、和宮の事については、豫て京都からわしのところへ勅旨が降つて、宮も據ない事情で關東へ御降嫁になつたところへ、圖らずも今度の事が起つたについては、陛下も宸襟を惱ましていらせられるから、お前が宜しく忠誠を勵まして、宮の御身の上に、萬一の事のないやうにせよとのことであつた。それ故、わしも、最初にこの事を談じたのだ。「和宮の事は、定めて貴君も御承知であらうが、拙者も、一旦御引受け申した上は、決して別條のあるやうなことは致さぬ。皇女一人を人質に取り奉るといふが如き卑劣な根性は、微塵も御座らぬ。この段は、何卒御安心下されい。その外の御話は、何れ明日罷り出て、ゆるゆる致さうから、それまでに、貴君も篤と御勘考あれ。」といひ捨てて、

陛下　明治天皇を申す。

その日は直ぐ歸宅した翌日卽ち十四日に、また品川へ行つて、西郷と談判した。ところが、西郷がいふには、「委細承知した。併しながら、これは拙者の一存にも計らひ難いから、今より總督府へ出掛けて相談した上で、何分の御返答を致さうが、それまでのところ、兎も角も、明日の進擊だけは中止させて置きませう。」といつて、傍に居た桐野や村田に、擊進中止の命令を傳へたまゝ、後はこの事に就いて何もいはず、昔話などして、從容として大事の前に横たはるを知らない有樣であつた。それには、わしもほと〳〵感心した。

あの時の談判は、實に骨だつたよ。官軍に西郷が居なければ、話はとても纏まらなかつただらうよ。その時分の形勢といへば、品

總督府　東征大總督の役所。當時官軍は靜岡市まで進擊してゐた。

桐野　名は利秋。陸軍少將。明治十年歿、年四十。

村田　名は新八。宮內大丞。明治十年歿。

川からは西郷などが來る、板橋からは伊知地などが來る。また江戸の市中では、今にも官軍が乘込むといつて大騷ぎさ。併し、わしは外の官軍には頓着せず、たゞ西郷一人を眼においた。

そこで西郷に、極く短い手紙を一通遣つて、雙方何處にか出會つた上、談判致したいとの旨を申し送り、またその場處は田町の薩摩の別邸がよからうと、此方から選定してやつた。すると、西郷からも、早速承知したと返事をよこして、いよ〳〵何日の何時に、薩摩屋敷で談判を開くことになつた。

當日、わしは羽織袴で馬に騎つて、從者を一人連れたばかりで、薩摩屋敷に出掛けたまづ一室へ案內されて、暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引つ切り下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を從へ、平氣な顏で出て來て、「これは實に遲

板橋　東京市板橋區。

伊知地　名は正治。伯爵。明治十九年歿、年五十九。

田町　東京市芝區。

刻しまして失禮。」と、挨拶しながら座敷に通つた。その様子は、少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。

さて、愈、談判になると、西郷は、わしのいふことを一々信用してくれて、その間一點の疑念も挾まなかつた「色々むづかしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受けします。」西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈も、その生命と財産とを保つことが出來、また徳川氏もその滅亡を免れたのだ。若しこれが他人であつたら、いや貴様のいふことは自家撞着だとか、言行不一致だとか、澤山の兇徒があの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實は何處にあるかとか、いろ〳〵やかましく責立てたに違ひない萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。併し、西郷はそんな野暮はいはない。その大局を達觀して、しかも果斷に富んで居たには、わしも感心

した。

この時の談判が、まだ始らない前から、桐野などいふ豪傑連中が、大勢で次の間へ來て、窃かに様子を窺つて居る。薩摩屋敷の近傍へは、官軍の兵隊がひし〳〵と詰めかけて居る。その有様は、實に殺氣陰々として物凄いほどだつた。然るに、西郷は泰然として、あたりの光景も眼に入らないもののやうに、談判を仕終へてから、わしを門の外まで見送つた。わしが門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊は、どつと一時に押寄せて來たが、わしが西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。わしは、自分の胸を指して兵隊に向かひ、「何れ今明日中には、何とか決着致さう。決定次第で、或は足下等の銃先にかゝつて死ぬこともあらうから、よく〳〵この胸を見覺えて置かれよ。」といひ

捨てて、西郷に暇乞ひをして歸つた。

この時、わしが殊に感心したのは、西郷がわしに對して、幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも、始終座を正して、手を膝の上に載せ、少しも戰勝の威光で以て、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつたことだ。その膽量の大きいことは、所謂天空海濶で、見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。」

それから、西郷に別れて歸りかけたのに、この頃江戸の物騷なことといつたら、中々話にもならないほどで、何處からともなく、鐵砲玉が始終頭の上を掠めて通るので、わしも、こんな中を馬に乘つて行くのは劍呑だと思つたから、馬をば別當に索かせて、わしは後からとぼ〳〵歩いて行つた。そして漸く城門まで歸ると、

敬天愛人
南洲書

西郷南洲筆蹟

一翁を始として、皆々がわしの事を氣遣つて、そこまで迎へに出て居つたが、わしの顏を見ると、直ぐに、まづまづ無事に歸つたのは目出度いが、談判の模樣はどうであつたかと尋ねるから、その顚末を話して聞かせた。ところが、皆も大層喜んで、「今し方、城中から四方の模樣を眺望して居たのに、始は官軍が諸方から繰込んで來るから、これは必定、明日進擊する積りだらうと氣遣つて居たが、先刻からは、また反對にどん〳〵繰りだして行くやうなので、如何したのかと不審に思つて居た。今、君の談判で、西郷が進擊中止の命令を發した譯と知れた。」といつた。わしは、この瞬間の西

郷の働きが行き渡つて居るのに、實際感服した。談判が濟んでから、たとへ歩いたといふものの、城まで歸るには、時間は幾らもかからないが、その短い間に、號令がちやんと諸方へ行き渡つて、一度繰込んだ兵隊を、また後へ引き戻すといふ働きを見ては、西郷はなか〳〵凡の男でないと、いよ〳〵感心した。畢竟、江戸百萬の人民が、命も助り、家も燒かれないで、今日のやうに繁昌して居るのは、みんな西郷が「諾し。」といつてくれたお蔭だ。

さて西郷の一諾で、一先づ事は治つたが、こゝに今一つの困難といふのは、これから先、江戸の人民をどう始末しようかといふ問題だ。併し、わしの方では、徳川の城さへ明け渡せば、後は皆官軍の方で、適宜に始末するだらうと思つて、始は默つて見て居たそこは、わしも人が惡いからね。これには、向うでも困つたと見えて、

大村益次郎
明治初年の軍人。明治二年歿、年四十六。

西郷も、相應には人が惡いさ「府下の事は、何も彼も勝さんが御承知だから、宜しくお願ひ申す。」といつて、このむづかしい仕事を、わしの肩へ投げかけて置いて、自分は、そのまゝ奥州の方へ行つてしまつた。わしも忌々しかつたけれど、仕樣がないから、どうかかうか手を附けかけた。ところが、大村益次郎などいふ男が、わしを憎んで、兵隊なんか差向けて、酷くいぢめるので、餘り馬鹿々々しいから、家へ引込んで、それなり打遣つて置いた。すると、大久保利通が來て、是非々々と懇ろに賴むものだから、それではといつて、わしもいよ〳〵本氣に肩を入れるやうになつたのだ。

この江戸の市中の事は、わしは豫て精密に調べて置いたのだが、當時の人口は、ざつと百五十萬ばかりあつた。その内、徳川氏から扶持を貰つて居たものは勿論、その外、諸大名の屋敷へ出入す

人民の為の策

吉井友實
伯爵。明治二十四年歿、年六十四。

海外の感慨

る職人や商人などは、皆直接間接に幕府のお蔭で食つて居たのだから、幕府の瓦解と共に、こんな人たちは、忽ち暮しが立たなくなる道理だ。全體、江戸は大阪などとは違つて、商賣が盛んなのでもなく、物産が豐かなのでもなく、たゞ〳〵政治の中心といふので、人が多く集るから、繁昌して居たばかりなのだ。それ故に、幕府が倒れると、かうなることは、固より知れきつて居たことさ。

就いては、この人たちに、何か新たな職業を與へなければならないのだが、何しろ百五十萬といふ多數の人民が、食ふだけの仕事といふものは、容易に得られない。そこで、わしはこの事情を精しく大久保に話したら、流石は大久保だ「それでは、斷然遷都の事に決しよう。」と、かういつた。卽ちこれが東京今日の繁昌の本だ。

丁度この事を決する時には、大久保と吉井友實と、わしと三人同席して居つたのだが、大久保も吉井も、已に死んでしまつて、わしばかり老いぼれながらも生き殘つて居るので、まことに今昔の感に堪へないよ。

世間の人はやゝもすると、芳を千載に遺すとか、臭を萬世に流すとかいつて、それを出處進退の標準にするが、人の世に處するには、たゞ誠心誠意を以て事に當るべきである。

要するに、處世の祕訣は誠の一字である。（氷川清話による）

道は天地自然のもの、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふ故、我を愛する心を以て人を愛するなり。

人を相手にせず、天を相手にすべし。天を相手にして、己を盡くし、人を咎めず、我が誠の足らざるところを尋ぬべし。（西郷南洲）

北畠親房　吉野朝の功臣。師重の子。正平九年歿、年六十三。

二　人臣の道

（神皇正統記）

神皇正統記六卷は、吉野朝の忠臣北畠親房の作で、延元四年頃に成つたものである。神代以來の國體を說き、治亂の跡を敍べて、當時の事に及んでゐるが、主眼とするところは、大義名分を論じ、吉野の朝廷が正統である所以を明瞭にするにあつた。從つて本書は、單なる歷史といふよりは、勤王の精神に燃えた北畠親房の、わが國體を論じた史論として見るべきである。

凡そ王土に生まれて、忠を致し命を捨つるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵ましし、その跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下として競ひ爭ひ申すべきにはあらぬにやましして、させる功無くして過分の望

前車の轍　「前車の覆へるは後車の戒。」（史記）

みを致すこと、自ら危むる端なれど、前車の轍を見ることは、誠に有り難き習ひなりけんかし。中古までは、人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅ぼし家を失ふ例あれば、戒めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべしといふ制符、たびたびありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は、宣旨を賜はりて諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝ族多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりにけり。この頃の諺には、一たび軍に驅合ひ、或は家の子・郎從節に死ぬる類ひもあれば、「わが功に於ては日本國を賜へ。」若しは「半國を賜はりても足るべからず。」などぞ申すめる。誠にさまで思ふことはあらじ

言語は君子
「言行は君子の樞機なり。」（易經）

堅き氷
「霜を履んで堅氷至る。」（易經）

潁川
支那河南省登封

なれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又朝威の輕々しさもおし量らるゝものなり。

「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも君を蔑ろにし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習ひなれば、亂臣賊子といふものは、その初め、心・言葉を愼まざるより出で來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらじ。人の心の惡しくなり行くを末世とはいへるにや。昔、許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗

北畠親房

縣の嵩山に發する。

巢父
支那の帝堯の頃の隱者。

將門
平將門のこと。

ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟・六腑の變るにはあらじ。よく思ひ習はせる故にこそあらめ。なほ行く末の人の心、思ひやるこそ淺ましけれ。大方おのれ一身は恩に驕るとも、萬人の怨みを殘すべきことをば、などか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に分たせ給はんことは、推して測り奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも、千萬人は喜ばじ。況や日本の半ばを志し、皆がら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、詞にも出で、面にも恥づる色のなきを謀叛の始といふべきなり。

昔の將門は、比叡山に登りて、大內を遠見して謀叛を思ひ企て

けるも、かゝる類ひにや侍りけん。昔は人の正しくて、自ら將門に見も懲り、聞きも懲り侍りけん。今は人の心かくのみ成りにたれば、この世はいよ〳〵衰へぬるにや。漢の高祖の天下を取りしは、蕭何・張良・韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて、少しきなる處を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代のことぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、自ら向かふことありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少しき處を望み賜はりけるとぞ。これは、人に廣く賞をも行はしめんがためにや。賢かりけるをのこにこそ。又直實といひける者に一處を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり。」と書きて賜ひてけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞の甚しきに、與へたる處の少き、誠に名を重くして利を輕くしける、いみじきことと口々に褒めあへりける。いかに心得て褒めけんと、いとをかし。

これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと、歎き侍る輩もありと聞えしかど、中一年ばかりは、誠に一統のしるし覺えて、天の下こぞり集りて、都の中はえ〴〵しくこそ侍りけれ。

（神皇正統記）

高祖　支那の漢の高祖。

平重忠　畠山重忠のこと。

五十四郡　昔陸奥國を五十四郡に分つた。

長岡　今宮城縣遠田郡田尻・富永・中坪の諸村に相當する。

直實　熊谷直實。

永田秀次郎　政治家。兵庫縣の人。貴族院議員。

木戸孝允　維新の功臣。明治十四年歿、年四十七。

鍋島氏　名は直正。

山内氏　名は豐信。

二三　版籍奉還に就いて

永田秀次郎

明治維新の改革中にて、最も重要なるものの一は、版籍奉還の事である。徳川幕府の倒れたる後に於て、各藩が若し久しく其の封土を保ちて、其の藩士を養はば、其の權力は、時として中央政府に對抗し得べく、此の如くにして時日を經ば、恰も建武中興の後、北條氏倒れて足利氏興れるが如く、徳川氏倒れて島津氏又は毛利氏の興るが如き事ともなるべく、維新の大業は、再び逆轉を見る虞があつた。こゝに於て、長州の木戸孝允、薩州の大久保利通等が、各〻其の主に說いて版籍を奉還せしめんとし、肥前の鍋島氏、土佐の山内氏も亦これに賛して、遂に明治二年正月廿日、四侯の連署を以て版籍奉還の議を上つたのである。其の文に、

方今大政新たに復し、萬機これを親らす。實に千歲の一機。其の名ありて其の實無かるべからず。其の實を擧ぐるは、大義を明らかにし名分を正すより先なるは無し。嚮に徳川氏の起るや、古家・舊族天下に半ばす。依りて家を興すもの亦多し。而して其の土地・人民、これを朝廷に受くると否とを問はず、因襲の久しきを以て今日に至る。世或は謂はん、これ祖先鋒鏑の經始する所と。吁何ぞ兵を擁して官庫に入り、其の貨を奪ひ、これ死を賭して獲る所のものといふに異ならんや。庫に入るものは、人其の賊たるを知る。土地・人民を攘奪するに至つては、天下これを怪しまず。甚しいかな、名義の紊亂すること。今や維新の治を求む。宜しく大體の在る所、大權の繫る所、毫も假すべからず。抑〻臣等居る所は、卽ち天子の土、臣等

牧する所は、卽ち天子の民なり。安んぞ私に有すべけんや。今謹んで其の版籍を收めて、これを上る。云々。

隨分思ひ切つた激越な口調であつて、自分達の行爲を盜賊呼ばはりをして居るのである。然も天下の諸侯二百有餘藩、皆これに倣うて、少しも不思議とは思はなかつた。かくして、維新の大業たる王政復古の實が行はれたのである。余はこれを先輩に聞いた事がある。外國の使臣が、嘗て井上侯爵に維新の大業を聞き、政權の朝廷に歸した事はこれを理解したけれども、版籍の奉還は、如何に說明してもこれを理解しない。統治の實權の移轉は止むを得ないが、所有權の性質ある版籍までを奉還して、何故に何人も異議を唱へなかつたか、殆ど解し難いといつたといふ事である。外人の此の疑問は、至極當然である。此の如き政治的社會の大

井上侯爵　名は馨。明治の功臣。大正四年歿、年八十一。

變革が、革命の形式に依らずして、平和の裡に實行さるゝといふ事は、世界の歷史に有り得べからざる所である。大化の新政の時、皇太子中大兄皇子がまづ所領を獻じて、諸臣も皆これに倣ひ、明治維新の時、薩・長・土・肥がまづ版籍を奉還して、諸侯も亦これに倣うた。此の如き心理狀態は、到底外國人の理解し能はざる所である。則ち中大兄皇子の上奏中にも、「天に雙日なく、國に二王なし。故に、天下を兼併して萬民を使ひ給ふべきは、唯天皇のみ。」といひ、又、薩・長・土・肥の上奏文にも、「臣等居る所は卽ち天子の土、臣等牧する所は卽ち天子の民なり。安んぞ私に有すべけんや。」といへるも、皆同一の信條より出でたるものである。卽ち我が建國の精神は、「我我國民は、天子の前に立ちて同一である。均しく民である。第一皇室、第二我である。或は族制の結果により、或は武家の閥族により

て、階級を生じたる觀あるも、我が國民の思想よりすれば、これ實に變態である、これ實に病的である。故に自由に放任すれば、不平等となりて弊害を生ずる。其の場合には、大義名分論を以てこれを平等にする。而して何人も、これが大義なり、名分なりと考へて、少しも怪しまない。我々は皇室の前に平等である事は、我が國の建國の大精神であると、誰しも信じて居るのである。

我が大和民族の精神は、實に第一皇室、第二我である。これが我日本國民の理想である。この精神が我々の血管を流れ、此の理想が我々の頭腦を支配するが故に、大化の新政も、明治の維新も、何の苦もなく行はれたのである。それは、此の大義名分には何人も反抗し能はぬがためである。蓋し實社會の現狀は、必ずしも理想の如くには行はれぬのが事實である。宇宙の萬事が其の通り

リンチ　私刑。

ワシントン　米國初代の大統領（一七三二―一七九九年）

リンカーン　米國第十六代の大統領。（一八〇九―一八六五年）

である。支那は孟子の所謂「王何ぞ必ずしも利を言はん。又仁義あるのみ。」といふのが理想であるが、支那の現狀ほど、此の理想に遠ざかつた國は無い。又耶蘇教國では、博愛を理想とし、平和を理想として居る。然るに、世界大戰爭の勃發はどうか。大戰の前後を通じて、獨・佛の憎惡はどうか。これ等も決して理想の如くには行はれて居ない。自由・平等の本家たる米國でも、リンチが行はれ、東洋民族移民の差別待遇が行はれて居る。併し、我々は、米國人の精神は矢張り自由・平等を理想とし、ワシントンやリンカーンを崇拜せる國民たる事を疑はない。故に、社會の現狀は、必ずしも理想と實際とは一致するものではない。否寧ろ理想と一致しないのが社會の常態である。これを理想の如くにならしめようと努力する所に、人間の高尚なる使命がある。我々は、我が日本の從來の歷

史的事實に鑑みて、我が國の政治は、必ずしも第一皇室、第二我の主義を理想通りに實現したものとは考へない。併しながら、これが我々大和民族の理想である、精神である。これを理想通りに實現せしむるに努力する所に、我々の高尚なる使命がある。我々は、此の如き理想を有し、此の如き平等觀念を有するを以て、此の理想に反したる政治の行はるゝに方りて、其の弊害に堪へざるに至らば、則ち忽ち其の本然の性に反りて、大化の新政となり、明治の維新となり、革命の慘禍を見る事無くして、社會改造を實現せしむる事を得るのである。此の如き特異の手段を有する國家は、他國に於て夢想し能はざる所である。たゞこゝに一言すべき事は、我々の第一皇室、第二我といふ思想は、皇室以外には四民平等なりといふ事であるが、此の所謂四民平等なるものは、我々が天皇の前に平等なりといふ事で、これを法律の用語を以てすれば、平等に權利能力を享有すといふが如き意味に於ての平等である。これを外交の用語を以てすれば、機會均等といふが如き意味に於ての平等である。これを宗教的の用語を以てすれば、神の前に立ちて凡ての人間は平等なりといふが如き意味に於ての平等である。決して賢愚を度外視する平等ではない。決して勤惰を度外視する平等ではない。我に此の理想あり、此の信念ありて、我が國は、こゝに窮するに及んでは相通じ、一種他國人に理解し難き活路を啓きて、恰も急灘を過ぎて平砂に臨むが如き平和を招來するを得るのである。我が國の堅實味は此の如くにして、更に其の鞏固なる一方面を有するのである。（日本の堅實性）

深作安文
文學博士。茨城縣の人。東京帝國大學教授。

二三　君民一家

深作安文

我が國では、皇室は國民全體の大宗家にまし〳〵、人民はその末流を辱うしてゐるのであつて、皇室は一般人民の尊崇の焦點となり、以て今日に及んだのである。これを君民一家といふ。

されば、我が國では、君主と人民との關係は、君臣たると同時に父子であつて、御歴代の天皇の、何れも深く人民を愛撫し給うたことは、恰も慈母の赤子に於けるが如く、人民が君主を仰慕し奉つたことは、猶赤子の慈母に於けるが如くである。雄略天皇の御遺詔の中に、「義ハ乃チ君臣、情ハ父子ヲ兼ヌ。」と拜せられるが、至懇至到な聖旨のほど、實に感激に堪へないけれども、かやうなことは、獨り雄略天皇ばかりでなく、列聖の御志であらせられたやうに拜察せられる。このことは大正天皇の御卽位禮の勅語の中に、

爾臣民世世相繼キ忠實公ニ奉ス義ハ則チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノコトク以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ。

と宣はせられたのに依つても知るべきである。神代の古から、人民に大御寶・蒼生・天の益人などの名稱があり、民族が古來殆ど理想的の統一を保ち、未だ一たびも分裂を生ずることのなかつたのは、全くこれがためである。

「君臣卽父子。」これ我が國體を研究する者の、どうしても輕々に看過すまじき事實である。故に治者・被治者といふやうな形式的名詞では、我が君民の關係をいひ表はすことが出來ない。父子といふ自然的名詞で、始めて能くこれをいひ表はすことが出來るのである。されば、君臣の分は初から明らかであつて、臣に下剋上

の行爲なく、君に暴逆の御振舞がない。皇室の御仁慈は、子に對する父の至情に基づき給ひ、臣民の忠誠は、父に對する子の至情に發する。その至情を以て至情に對するところから、上下透徹して少しの曇をも留めないのである。既に君民一家であり、また君臣卽父子である。是に於てか、忠と孝とは、左の諸意義に於て相一致する。

我が國では、國と家との差は、單に規模の大小に過ぎない。國を縮小すれば家となり、家を擴大すれば國となる。否、國はやがて大なる家である。故に君主としての天皇に對し奉る忠は、一家長としての天皇に對し奉る孝である。

我等の歷代の祖先は、列聖に對して忠を盡くし奉つた者であるから、今日我等が天皇陛下に對して忠を盡くし奉るのは、祖先の志を成す所以で、取りも直さず祖先に對する孝である。卽ち忠孝兩全であるのである。

孝は、子たる者が誠を致してその親に仕へることをいひ、忠は、臣たる者が誠を致してその君に仕へ奉ることをいふのである。されば、その誠たる點は兩者全く相等しく、親に對する孝を以て君に仕へ奉れば、卽ち忠となり、君に對し奉る忠を以て親に仕へれば、卽ち孝となるのである。

人の子たる者が、家にあつて誠を以て親に仕へれば孝となり、國にあつて誠を以て君に仕へ奉れば忠となる。卽ち我には、單に一誠あるのみで、唯その所を異にしその範圍を異にするところから、孝となり忠となるのである。

世界何れの處にも、家のないものはなく、何れの處にも、國のな

いものはない。家ある處、孝を以て子たる者の道としないものはなく、國ある處、また忠を以て臣たる者の道としないものはない。それ故、忠孝は人といふ人に通ずる大道であつて、決して我が民族にのみ存するものではない。唯他國にあつては、忠と孝とは分離して存在し、我が國に於けるやうに渾然として合一しないのである。支那では、忠よりも孝を重んずるばかりでなく、その忠は「君臣義あり。」といつて、よほど形式的のものである。臣たる者がその君を諫めて、若し聽かれなかつたならば、去つてよい場合があるのである。然るに、我が國では、孝よりも忠を重んじ、よしや君は君たらずとも、臣は臣たらねばならぬのである。故元田東野翁が、「人臣の道、進んで喜ばず、退いて怨みず、貴なく賤なく、大なく小なく、所在當に忠を致すべし。」といつたのは、卽ちこれである。

元田東野　名は永孚。男爵。熊本縣の人。明治二十三年歿、年七十四。

要するに、我が國の忠は孝に一致する忠であり、孝は忠に一致する孝である。それ故、嚴密にいへば、我が國に於ける忠と孝とは、支那の忠孝といふ文字では、十分にいひ表はすことは出來ないのである。これが、我が國の忠と孝とが、他國のそれらと到底同一視することの出來ない所以である。實に忠孝一致、若しくは忠孝一本は、我が國民道德の特色中の特色である。（國民道德要義）

同字表

あん	庵	が	鵞
	菴		鵝
あん	按	かい	界
	案		堺
い	頤	がい	蓋
	頤		葢
いう	祐	がい	崖
	佑		崕
いつ	逸	がい	礙
	佚		碍
いん	陰	がい	槩
	陰		概
いん	蔭	かう	效
	蔭		効
うつ	鬱	かう	傲
	欝		傲
えい	詠	かう	稾
	咏		槁
えい	穎	かう	坑
	頴		阬
えん	煙	かう	稾
	烟		稿
えん	焔	かう	攷
	焰		考
えん	鹽	かう	敲
	塩		敲
えん	艷	かう	昴
	艶		昂
えん	宴	かう	校
	讌		校
か	箇	かう	羹
	個		羹
か	廈	がう	濠
	厦		壕
が	峩	かく	貉
	峨		狢
がく	嶽	きう	嗅
	岳		嗅
かん	閒	きう	廐
	間		厩
かん	簡	ぎ	戲
	簡		戲
かん	杆	き	姫
	桿		姬
かん	鑑	き	羈
	鑒		羈
かん	姦	き	碁
	奸		棋
がん	雁	き	歸
	鴈		帰
がん	巖	き	熙
	岩		熙
き	器	き	畸
	器		畸
き	規	き	亟
	規		亟
き	鳩	こう	句
	鳩		勾
こう	鉤	こう	侯
	鈎		侯
こう	亙	こう	恆
	亘		恒
こう	后	こう	寇
	后		寇
こう	関	こう	控
	関		扣
こく	國	こく	剋
	囲		尅
こく	穀	こく	穀
	穀		穀
きう	糾	くわう	荒
	糾		荒
きつ	迄	くわつ	闊
	迄		濶
きつ	吉	くわん	函
	吉		函
きやう	況	くわん	關
	況		関
きやう	强	くわん	館
	強		舘
きやう	競	くわん	款
	競		欵
きやう	京	ぐわん	玩
	京		翫
きやく	卻	ぐん	羣
	却		群
きゆう	躬	けい	慧
	躬		惠
きゆう	窮	けい	攜
	窮		携
きよ	虛	けい	徑
	虛		逕
きよう	凶	けい	谿
	兇		溪
く	驅	けい	雞
	駆		鶏
くわ	華	けい	憩
	花		憇
くわ	嘩	げき	隙
	譁		隙
くわ	譌	けつ	決
	訛		決
ぐわ	畫	げつ	齧
	畫		嚙
くわい	回	けふ	協
	回		叶
くわい	廻	けふ	協
	廻		協
くわい	怪	けふ	脇
	恠		脅
けふ	胸		
	胸		
けん	研		
	研		
けん	妍		
	妍		
けん	獻		
	献		
けん	險		
	嶮		
けん	劒		
	剣		
げん	減		
	減		
こ	鼓		
	鼓		
	皷		

こん 婚 婚 さん 懺 懺 しう 讎 讐
さ 鎖 鎖 さん 蠶 蠶 蚕 しつ 蝨 虱
さ 蓑 簑 ざん 慚 慙 しやう 牀 床
さう 瑣 瑣 ざん 讖 讖 しやう 嘗 嘗
さう 桑 桒 し 絲 糸 しやう 牆 墻
さう 雙 双 し 杭 杭 しふ 澀 渋
さう 帚 箒 し 姉 姉 じん 機 機
さう 槍 鎗 し 顋 腮 じゆ 呪 呪
さう 象 象 し 越 趦 しゆく 倏 倏
さう 像 像 し 紙 帋 じゆん 準 準
さく 冊 冊 し 弛 弛 じゆん 笋 筍
さふ 插 挿 し 嘴 觜 しよ 煮 煮
さふ 雜 雜 し 背 眥 しよ 處 処
さん 笄 笄 し 廁 厠 じよ 敍 叙
さん 贊 賛 し 廝 廝 しよう 昇 升
さん 鑽 鑽 し 俟 竢 しよう 證 証
さん 鑽 鑽 じ 辭 辞 しよう 稱 称
さん 纘 纘 じ 爾 爾 しよう 蹤 踪
さん 攢 攢 しう 鏽 銹 じよう 穴 穴
さん 纂 纂 しう 收 収 しよく 職 職

しよく 飾 飾 せん 船 船 たい 體 体
しよく 囑 嘱 せん 潛 潜 だい 臺 台
し 晉 晋 せん 僭 僭 たう 韜 韜
し 眞 真 せん 僊 仙 たう 島 嶋
し 唇 脣 せん 翦 剪 たう 黨 党
じん 刃 刃 そ 麤 麁 たう 搗 擣
じん 紉 紉 そ 疏 疎 たく 託 托
じん 盡 尽 そ 蘇 甦 たん 歎 嘆
じん 垂 垂 そう 總 総 たん 膽 胆
すゐ 醉 酔 そう 櫻 桜 たん 擔 担
ずゐ 蕊 蕋 そう 櫟 椋 たん 但 但
せい 壻 婿 そく 即 即 ち 恥 耻
せい 聲 声 ぞく 屬 属 ちやう 腸 腸
せい 整 整 そん 村 邨 ぢやう 場 場
せう 鈔 抄 た 詫 託 ちやく 著 着
せつ 竊 窃 だ 拏 拿 ちゆう 沖 冲
せん 纖 繊 たん 佗 侘 ちゆう 蟲 虫
せん 籤 籤 だ 墮 堕 ちゆう 廚 厨
せん 殲 殲 だ 舵 柁 ちよ 豬 猪

ちよう 豬 豕 どう 同 仝 ばう 忘 忘 へい 屏 屏 や 野 埜 るゐ 涙 泪
ちよく 敕 勅 とん 遯 遁 ばく 麥 麦 へい 并 并 や 彌 弥 れい 隷 隸
ちん 沈 沉 なん 輭 軟 はく 柏 栢 へい 併 併 よ 與 与 れい 禮 礼
ちん 鎮 鎮 にく 肉 宍 ばつ 罰 罰 へい 餅 餅 よ 餘 余 ろ 爐 炉
ちん 碪 砧 にん 妊 妊 ばつ 拔 抜 へう 飈 飈 よう 涌 湧 ろ 艫 艫
ちん 砧 砧 にん 袵 衽 ばつ 跋 跋 べう 貓 猫 よう 鎔 熔 わう 往 往
てい 隄 堤 ねい 佞 侫 はん 阪 坂 へん 徧 遍 よく 欲 慾 わう 笹 笹
てう 弔 吊 ねん 黏 粘 はん 汎 泛 ほ 鋪 舗 ら 倮 裸 わん 盌 碗
てう 嘲 謔 ねん 霸 覇 ひ 秘 秘 ほ 褓 褓 らん 亂 乱 ゐん 猥 猿
てつ 鐵 鉄 は 杯 盃 ひ 毗 毘 ほう 豐 豊 らん 覽 覧 を 汚 汚
てふ 輒 輙 はい 點 点 はう 寶 宝 びやう 廟 廟 ほう 峯 峰 り 裏 裡 をん 溫 温
てん 纏 纏 はう 褒 褒 ひよう 憑 凭 ぼう 矛 鉾 り 貍 狸
てん 詔 詔 はう 逆 逆 ひよう 憑 憑 ぼく 樸 朴 りう 留 留
でん 臀 臀 はう 髣 彷 ひよう 氷 氷 まん 萬 万 りう 榴 榴
と 兎 兎 ばう 萌 萌 ふ 富 冨 みやく 脈 脉 りやう 兩 両
と 菟 菟 ばう 冒 冒 ぶ 无 無 む 夢 梦 りやう 涼 凉
と 妬 妒 ばう 帽 帽 ふつ 髴 彿 めん 綿 絲 りやく 略 畧
と 覩 覩 ばう 莽 莽 ぶつ 佛 仏 めん 麵 麪 りん 稟 禀
とう 燈 灯 ばう 亡 亡 ふん 墳 墳 めん 冤 寃 りん 鄰 隣
とう 鬪 鬪 ばう 網 網 へい 竝 並 も 摸 摹 りん 躙 躪

宛字表

あこぎ　阿漕
あたら　可惜
あつぱれ　天晴
あはう　阿房
うるさし　五月蠅し
おぼつかなし　覺束なし
かはいらし　可愛らし
かはいさう　可哀さう
かひ　甲斐
かやう　斯様
がんじやう　頑丈、岩疊
きつと　屹度
ぎやう〳〵し　仰仰し
ぎやうさん　仰山
ぐあひ　具合、工合
ぐづつく　愚圖つく
くれ〳〵　呉々
けんつく　剣突
けんのん　剣呑
ごまかす　胡麻化す
さすが　誤魔化す
さた　流石
さつぱり　沙汰
さほど　薩張
さやう　左程
しかつめらし　左様
しまひ　鹿爪らし
しやあ〳〵　仕舞
じようだん　洒蛙々々
じよさいなし　冗談
すてき　如才なし
せは　素敵、素的
せつかく　世話
だゞ　折角
たつて　駄々
たのもしく　達而
　　頼母敷
だめ　駄目
たらふく　鱈腹
ぢだんだ　地團太
ちようど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
ちんぷんかん　珍糞漢
つがふ　都合
つじつま　辻褄
つど　都度
づぶとし　圖太し
でたらめ　出鱈目
とかく　兎角
とつぴ　突飛
とんきよう　頓狂、頓興
とんちやく　頓著
とんちんかん　頓珍漢
なか〳〵　中々
なにとぞ　何卒
のんき　呑氣
ばか　馬鹿
はかなし　果敢なし
はで　派手
ふざける　巫山戯る
ふつゝか　不束
ふるまひ　振舞
べらぼう　箆棒
へんてこ　變挺
まじく　間敷
まんざら　萬更、滿更
みまひ　見舞
むだ　無駄
むたい　無體
むちやくちや　無茶苦茶
むつかしく　六ヶ敷
むてつぽう　無鐵砲
むやみ　無闇
めい〳〵　銘々
めちやくちや　滅茶苦茶
めつたに　滅多に
めつぽう　滅法

めでたく　目出度
めんどう　芽出度
もつたい　面倒
やかまし　勿體
やたら　八釜し
やつき　八鰐
　　躍起
やはり　矢張
やぼ　野暮
ゆゝし　由々し
をこがまし　嗚呼がまし
わんぱく　腕白

國字表

（）ノアルノハ漢字ニモ同體ノ文字ガアルガ別意義デアルモノ

あつぱれ　遖
あはび　（蚫）
いわし　鰯
うそ　（嘘）
えのき　榎
おき　（沖）
おきて　（掟）
おもかげ　俤
おろし　颪
かうぢ　糀
かし　樫
かすがひ　鎹
かせぐ　（持）
かつを　（鰹）
かばん　鞄
かます　叺
かん　（燗）
くめ　粂
こがらし　凩
こむ　込
こらふ　恪
さかき　榊
さすが　（遉）
さぞ　（嘸）
さて　（扨）
さび　（錆）
しかと　聢
しぎ　鳴
しきみ　櫁
しづく　（雫）
しつけ　躾
しのぎ　（鎬）
しのぶ　（偲）
すべる　辷
そま　杣
たうげ　峠
たすき　襷
たこ　（鮹）
たら　鱈
ぢやう　（錠）
ちん　狆
つかふ　閊
つき　（坏）
つじ　辻
つばき　（椿）
とが　栂
とかす　（溶）
とぎ　（伽）
とち　栃
とても　迚
とひ　（樋）
とも　鞆
なぎ　凪
など　抔
にほ　鴆
にほひ　匂
ぬえ　（鵺）
はかどる　（捗）
はぎ　（萩）
はた　畑
はたけ　畠
はたらく　働
はなし　噺
はなし　（咄）
ひ　（樋）
ひえどり　鵯
びた　（鐚）
ひゝらぎ　（柊）
びやう　鋲
ひわ　（鶸）
ふもと　麓
ほこ　（桙）
まき　（槇）
まさ　（柾）
ます　（枡）
まろ　麿
みを　（澪）
むしる　（毟）
もく　杢
もんめ　匁
やがて　畠
やり　鑓
わぶ　（詫）
わん　（鋺）

以下ニ掲ゲルトコロハ近來西洋語ノ渡來ニ伴ナツテ新シク作ラレタモノデアル但シ（　）ノアルモノハ意味ハ別デアルガ支那ノ書ニモ見エル文字デアル

インチ	（吋）
キログラム	瓩
キロメートル	粁
サンチメートル	糎
ミリメートル	粍
メートル	米突、米
フィート	呎
マイル	哩
トン	瓲
セン	腺

女子國文選〔新制版〕

定價	
卷一、二各金六拾五錢	
卷三、四各金六拾四錢	
卷五、六各金六拾錢	
卷七、八各金五拾八錢	
卷九、十各金五拾貳錢	

昭和十二年五月八日印刷
昭和十二年五月十二日發行
昭和十二年十二月九日訂正印刷
昭和十二年十二月十三日訂正發行

不許複製

編纂者　明治書院編輯部
代表者　三樹退三

發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社明治書院
取締役社長　三樹退三

印刷所　東京市神田區三崎町二丁目一番地
株式會社明章印刷所
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目
（振替東京四九九一番）
株式會社明治書院
電話神田(25)二一四七番(3)